

望月町文化財調査報告書 第14集

胡桃沢・瓜生坂A・宮久保A
布施山寺A・岩井遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1984

望月町教育委員会
佐久建設事務所

序

ここに、国道142号線バイパス建設工事に伴って実施された、昭和56年度胡桃沢遺跡、昭和57年度瓜生坂A、宮久保A、布施山寺A、岩井遺跡の発掘調査が終了し、昭和58年度の事業の中で本緊急発掘調査報告書が刊行される運びとなりました。これにより、国道バイパスに係る発掘調査及び報告書作成業務は、全て終了したことになります。

まず先に手掛けたのは、昭和53年度茂田井地籍の犬飼遺跡からでした。続いて昭和55年には、協和の大塚及び尾崎地籍で大塚第1号・2号、尾崎第4号の各古墳の調査を実施し、そして昭和56年・57年の本調査が行われ、合計9遺跡にものぼっています。この継続調査により縄文時代中期と、奈良時代・平安時代・鎌倉時代における生活址がもののみごとに浮き彫りにされ、当町を始めとして、広域に渡る歴史的な研究に大きく貢献するものとなったことは間違いありません。

特に当地域は、縄文時代などの文化的諸段階もさることながら、御牧原台地を中心に「望月牧」が存在し、しかも、我国の勅旨牧の中では最も重要視されたものであったため、牧に関する内容やその社会的背景の解明が最大の関心事であり、文献資料の裏付けともなる具体的な資料の出現が望まれるものでありました。これら一連の調査により、過去の資料集積の上に、さらに有力な資料を多数追加するものであり、牧の研究の基礎固めができつつあるという段階にまで達してきています。但し、望月牧の所在地そのものの発掘調査が行われていないため、やや片手落ちという感がありますが、今後における重要課題として、その取り組みに期待したいところです。

本調査並びに報告書作成にあたり、顧問の森嶋先生をはじめとし、調査員、作業員、協力者の方々には熱意あふれる御指導をいただきました。衷心より敬意と感謝の意を表する次第です。

本調査の成果が、記録保存の役目を荷って、多くの方々に利用され、歴史研究の益々の発展の足掛りとなれば幸いと存じ願うものであります。

1984年3月20日

望月町教育委員会
教育長 佐藤初雄

例 言

1. 調査及び報告書作成業務

- 1). 本調査は、佐久建設事務所の委託を受けて、望月町教育委員会が実施したもので、本書は調査の内容をまとめた記録保存の報告書である。調査の経過や構成等の内容は、本文中に記載した。
- 2). 遺構の実測は、福島邦男と福島茂子が行い、一部佐藤 敏が行った。
- 3). 写真撮影は、調査現場に係るもの、遺物写真ともに福島邦男が行った。
- 4). 遺物の洗浄は、平林さだ、注記は、福島茂子、遺物の復元は、福沢幸一、掛川喜四郎、佐藤 敏、福島茂子、福島邦男が行った。
- 5). 遺物の実測、遺構及び遺物のトレースは、福島邦男、図の作成は、福島邦男、掛川喜四郎、福島茂子、図版の作成は、福島邦男が行った。
- 6). 拓本は、掛川喜四郎、福島茂子が行った。
- 7). 本書の執筆は、福島邦男が行った。
- 8). 調査に係る図面・書類等は、望月町教育委員会が保管している。

2. 本書の内容

- 1). 本書は、整理事業の時間的な都合から、それぞれの遺構・遺物について十分な説明や検討を加えることができなかったことを了承されたい。
- 2). したがって、図及び図版に重点を置き、できる限り資料の提示を行った。
- 3). 布施金山A遺跡・瓜生坂祭祀遺跡・宮久保B遺跡の出土資料は、本調査の成果を見る上では欠かすことのできないものであり、しかも、瓜生坂祭祀遺跡の実測図（藤沢・信濃19-4）を除き、写真等未発表の資料であるため掲載した。
- 4). 資料提供者は、布施金山A遺跡こし器：故土屋 政氏、瓜生坂祭祀遺跡手捏土器、白玉：故土屋七五三郎氏、宮久保B遺跡手捏土器：土屋重雄氏である。記して感謝の意を表します。
- 5). 図及び図版の番号は、遺跡単位には付さず、5遺跡を通して付けた。但し、胡桃沢遺跡と他の4遺跡は、調査の契約年度が異なるため、まとめて区切りをつけた。

本文目次

序

例言

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 昭和56年度胡桃沢遺跡発掘調査の経過	1
1. 調査の構成 2. 調査の経過 3. 調査団組織 4. 調査日誌	
第2節 昭和57年度瓜生坂A・宮久保A・布施山寺A・岩井遺跡発掘調査の経過	3
1. 調査の構成 2. 調査の経過 3. 調査団組織 4. 調査日誌	
第II章 遺跡の立地及び歴史的環境	6
第III章 胡桃沢遺跡 (MKM)	10
第1節 遺構及び遺物	10
1. 第1号住居址 2. 第2号住居址 3. 第3号住居址 4. 第4号住居址 5. 第5号住居址 6. 第6号住居址 7. 第7号住居址 8. 第8号住居址 9. 第9号住居址 10. 第10号住居址	
第2節 遺物	17
1. 縄文時代の遺物 2. 平安時代の遺物	
第3節 まとめ	35
第IV章 瓜生坂A遺跡 (MUZ・A)	37
第1節 遺構	37
第2節 遺物	37
第V章 宮久保A遺跡 (MMK・A)	41
第1節 遺構及び遺物	41
1. 第1号住居址 2. 第2号住居址	
第2節 遺構外出土遺物	44
第VI章 布施山寺A遺跡 (MFY・A)	48
第1節 遺構	48
第2節 遺物	49
1. 縄文時代の遺物 2. 奈良時代の遺物 3. その他の遺物	
第VII章 岩井遺跡 (MII)	53

第1節 遺構及び遺物	53
1, 第1号住居址 2, 第2号住居址 3, その他の遺物	
第Ⅳ章 まとめ	60

挿図目次

第1図 発掘調査地域位置図 (1:100,000)	7
第2図 発掘調査地域概要図及び周辺遺跡分布図 (1:10,000)	8
第3図 胡桃沢遺跡グリッド配置及び遺構全体図((1:400)	10
第4図 胡桃沢遺跡第1・2・4号住居址実測図 (1:60)	11
第5図 胡桃沢遺跡第3号住居址実測図 (1:60)	13
第6図 胡桃沢遺跡第3号住居址深鉢形土器出土状態実測図 (1:3)	14
第7図 胡桃沢遺跡第5・6・7・8・9号住居址カマド実測図 (1:60)	15
第8図 胡桃沢遺跡第10号住居址実測図 (1:60)	17
第9図 胡桃沢遺跡第3号住居址出土土器 (1:1:6、他1:3)	18
第10図 胡桃沢遺跡第3号住居址出土土器 (1:3)	19
第11図 胡桃沢遺跡第3号住居址出土土器 (1:3)	20
第12図 胡桃沢遺跡出土土器・土偶 (25・26・1:2、他1:3)	21
第13図 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)	22
第14図 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)	23
第15図 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)	24
第16図 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)	25
第17図 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)	26
第18図 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)	27
第19図 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)	28
第20図 胡桃沢遺跡第1号住居址(1)、第3号住居址(2~12)出土石器 (1:4)	29
第21図 胡桃沢遺跡出土土偶・把手・石器 (1・2・1:2、他1:4)	30
第22図 胡桃沢遺跡出土石器 (1:4)	31
第23図 胡桃沢遺跡出土石器 (1:4)	32
第24図 胡桃沢遺跡第10号住居址出土土器 (1:3)	33
第25図 胡桃沢遺跡第10号住居址出土土器 (11・1:4、他1:3)	34
第26図 瓜生坂A遺跡グリッド配置図 (1:300)	38
第27図 瓜生坂A遺跡出土土器 (1:3)	39

第28図	瓜生坂A遺跡出土土器 (21・1:4、他1:3) [22は布施金山A遺跡参考資料].....	40
第29図	宮久保A遺跡グリッド配置及び遺構全体図 (1:300).....	42
第30図	宮久保A遺跡第1号住居址実測図 (1:60).....	43
第31図	宮久保A遺跡第2号住居址実測図 (1:60).....	44
第32図	宮久保A遺跡第2号住居址実測図 (1:60).....	45
第33図	宮久保A遺跡出土土器 (1:3).....	46
第34図	宮久保A遺跡出土土器 (1:3).....	47
第35図	布施山寺A遺跡グリッド配置図 (1:300).....	48
第36図	布施山寺A遺跡出土土器 (1:3).....	50
第37図	布施山寺A遺跡出土土器・石器 (1:3).....	51
第38図	布施山寺A遺跡出土土器・鉄滓 (1:3).....	52
第39図	岩井遺跡グリッド配置及び遺構全体図 (1:400).....	53
第40図	岩井遺跡第1号住居址実測図 (1:60).....	54
第41図	岩井遺跡第2号住居址実測図 (1:60).....	55
第42図	岩井遺跡第2号住居址須恵器裏出土状態実測図 (1:10).....	56
第43図	岩井遺跡出土土器・石器 (1:1住、2~4:2住) (2・4・1:4、他1:3).....	57
第44図	岩井遺跡出土土器 (1:3).....	58
第45図	岩井遺跡出土土器 (1:3).....	59

表 目 次

第1表	調査地域周辺の遺跡地名表.....	9
-----	-------------------	---

図 版 目 次

図版1	胡桃沢遺跡全景	図版8	胡桃沢遺跡遺物
図版2	胡桃沢遺跡遺構	図版9	胡桃沢遺跡遺構
図版3	胡桃沢遺跡遺構・遺物	図版10	胡桃沢遺跡遺物
図版4	胡桃沢遺跡遺物	図版11	胡桃沢遺跡遺物
図版5	胡桃沢遺跡遺物	図版12	胡桃沢遺跡遺物
図版6	胡桃沢遺跡遺物	図版13	瓜生坂A遺跡全景
図版7	胡桃沢遺跡遺物	図版14	瓜生坂A遺跡遺物

- 図版15 宮久保 A 遺跡全景
図版16 宮久保 A 遺跡遺構
図版17 宮久保 A 遺跡遺構・遺物
図版18 宮久保 A 遺跡遺物
図版19 宮久保 A 遺跡遺物
図版20 布施山寺 A 遺跡全景
図版21 布施山寺 A 遺跡遺物

- 図版22 岩井遺跡全景
図版23 岩井遺跡遺構
図版24 岩井遺跡遺物
図版25 岩井遺跡遺物
図版26 岩井遺跡遺物
図版27 瓜生坂祭祀遺跡遺物（参考資料）
図版28 瓜生坂祭祀遺跡遺物（参考資料）

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 昭和56年度胡桃沢遺跡発掘調査の経過

1. 調査の構成

- 1). 遺 跡 名 胡桃沢遺跡
- 2). 所 在 地 長野県北佐久郡望月町大字望月字胡桃沢1543-1、1543-2、1544-1
1544-2、1545-1、1545-2
- 3). 調査委託者 佐久建設事務所 所長 日浦茂喜
- 4). 調査受託者 望月町教育委員会 教育長 佐藤初雄
- 5). 調査主体 望月町教育委員会及び教育委員会の組織した発掘調査団
- 6). 調査原因 国道142号線バイパス建設工事の施行に伴い、胡桃沢遺跡に影響が及ぶため事前に発掘調査を実施し記録保存を図る。
- 7). 調査期間 昭和56年12月1日～昭和56年12月22日（現場調査）
- 8). 調査面積 800㎡
- 9). 調査方法 3m×3mのグリッド設定による平面発掘

2. 調査の経過

本発掘調査は、本来遺跡の現状を変更する事業主体者の佐久建設事務所が実施すべき所であるが、発掘調査を実施する組織が持たないため、委託契約の締結により望月町教育委員会が実施したものである。

佐久建設事務所から発掘調査の依頼があったのは10月下旬のことであり、当該年度中に実施完了をしなければならないものであった。すでに県営ほ場整備事業に伴う現場調査が終了し、報告書作成の整理段階であったが、急を要するものと判断し、急拠調査の実施に向けて手続きを開始した。年度末までの期間はあったが、土地柄1月以降の調査は不可能であるため所定の手続きが終了した12月1日から開始をした。なお、発掘調査報告書は、完了報告書に添付することは期間的に不可能と判断し、年度を改めて別契約とした。以下その内容を示し、経過としたい。

- 1). 昭和56年11月5日 胡桃沢遺跡現地協議 参加者：長野県教育委員会文化課、佐久建設事務所、望月町役場建設課、望月町教育委員会
- 2). 11月26～27日 発掘調査地域の桑の抜根作業
- 3). 11月30日 「昭和56年度胡桃沢遺跡発掘について」（通知）の提出
- 4). 12月1日 佐久建設事務所 所長 日浦茂喜と望月町教育委員会教育長 佐藤初雄

との間で「発掘調査委託契約」の締結

- 5). 12月1日 発掘調査現場で結団式 佐藤幸男町長、佐藤初雄教育長、教育委員会事務局、調査団参加。結団式後調査を開始する。

3. 調査団組織

- 顧問 森嶋 稔 (日本考古学協会々員・千曲川水系古代文化研究所主幹)
団 長 福島邦男 (日本考古学協会々員・望月町教育委員会学芸員)
調査員 渡辺重義 (長野県考古学会々員) 黒岩忠男 (長野県考古学会々員)
三石延雄 (長野県考古学会々員) 佐藤 敏 (長野県考古学会々員)
作業員 大森一尾、桜井卯作、関嘉津武、吉沢浩夫、吉沢弥太郎、大森英七、日暮信生、今井伊一、永井健藏、市川貞雄、飯島久子、小林孝一、大塚米子、平林さだ、福島茂子
協力者 福沢幸一、掛川喜四郎、大森 稔、川井 淳、真田智昭、依田健彦、井出誠司、中野君雄、須崎誠子、桑沢俊雄、桑沢きさ、近藤尚義・吉田 稔
調査事務 (社会教育係) 大森睦男(係長)、高橋重雄、上野早苗、小林辰男、福島邦男

4. 調査日誌

- 12月1日 結団式の後調査を開始する。グリッド設定後グリッド掘りを始める。住居址と思われる落ち込みとカマドを検出する。縄文中期、土師器、須恵器、灰軸陶器が出土する。
12月2日～7日 雪や霜柱に悩まされながらのグリッド掘りが続く。本日までに縄文時代中期の住居址4棟、カマドと思われる焼土5基を検出する。建物は、縄文中期土器、打製石斧、凹石、土師器環、甕、須恵器環、甕、灰軸陶器が出土し、中でも中期土器が多い。
12月8日 縄文中期の住居址は、それぞれ第1～4号住居址とし、第1号住居址の掘り込みを開始する。
12月9日 第2～3号住居址の掘り込みを開始する。3号住からは土偶や打製石斧が出土。
12月10日 第4号住居址の掘り込みを開始する。1号住、2号住、土層断面の写真撮影。
12月11日～12日 1・2号住の測量。3号住の掘り込み。3号住から大形深鉢形土器が出土。
12月13日 新たに平安時代の住居址を検出する。
12月14日～15日 3号住の実測と遺物の取り上げ。10号住のプラン確認作業。
12月16日～18日 10号住の掘り込みが行なわれ、土師器環の完形品8点、灰軸皿完形品1点、須恵器鉢形土器半欠品1点、耳皿完形品1点が出土し、さらに住居址中央部に炭化材が多量に検出される。
12月19日 10号住の清掃、写真撮影、遺物の取り上げを行う。
12月20日 本日作業休み。
12月21日 5～10号住の実測。遺構の全体測量を行う。
12月22日 遺構の点検、図面の点検、10号住調査地域外への掘り込み、本日で調査終了。

第2節 昭和57年度瓜生坂A・宮久保A・布施山寺A ・岩井遺跡発掘調査の経過

1. 調査の構成

- 1). 遺 跡 名 瓜生坂A遺跡、宮久保A遺跡、布施山寺A遺跡、岩井遺跡
- 2). 所 在 地 瓜生坂A遺跡：長野県北佐久郡望月町大字布施字瓜生坂379-1、396-1
397
宮久保A遺跡： " 字宮久保475、476、498、
449
布施山寺A遺跡： " 字山寺522-2、507、7、
548、550、551-1
岩井遺跡： " 字岩井637-1、637-3
638
- 3). 調査委託者 佐久建設事務所 所長 山下純平
- 4). 調査受託者 望月町教育委員会 教育長 佐藤初雄
- 5). 調査主体 望月町教育委員会及び教育委員会が組織した発掘調査団
- 6). 調査原因 国道142号線バイパス建設工事の施行に伴い、本遺跡に影響が及ぶため事前に発掘調査を実施し記録保存を図る。
- 7). 調査期間 (現場調査) 昭和57年6月2日～昭和57年7月29日
(遺物洗浄) 昭和57年12月20日終了
- 8). 調査面積 瓜生坂A遺跡：513㎡、宮久保A遺跡：630㎡、布施山寺A遺跡：513㎡、岩井遺跡：630㎡
- 9). 調査方法 3m×3mのグリッド設定による平面発掘

2. 調査の経過

本発掘調査は、本来遺跡の現状を変更する事業主体者の佐久建設事務所が実施すべき所であるが、発掘調査を実施する組織が持てないため、委託契約の締結により望月町教育委員会が実施したものである。

この4遺跡は、前年度に調査を終了した胡桃沢遺跡と同じ国道142号線バイパス路線の延長上にあり、現地協議は、胡桃沢遺跡と同日に行った。各遺跡とも非常に狭い沢の中にあり、しかも道路幅だけの調査ということで、かなり限定された地域のみが対象であった。望月町は、本年度県営ほ場整備事業と個人住宅建設に伴う発掘調査が4遺跡あり、バイパスの調査を含めると8遺跡にも及ぶということで、委託契約は、現場調査と遺物の洗浄までとし、報告書作成業務は次年に別契約とした。以下その内容を示し、経過としたい。

- 1), 昭和56年11月5日 現地協議 参加者：長野県教育委員会文化課、佐久建設事務所、望月町役場建設課、望月町教育委員会
- 2), 昭和57年3月17日 「昭和57年度埋蔵文化財緊急発掘調査における土地所有者の承諾書について」(依頼)
- 3), 5月20日 「埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について」(通知)の提出
- 4), 5月20日 佐久建設事務所 所長 山下純平と望月町教育委員会 教育長 佐藤初雄との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」の締結
- 5), 6月2日 瓜生坂A遺跡から重機による桑の抜根及び表土剥ぎ
- 6), 6月7日 結団式を行い、発掘調査を開始する。
- 7), 昭和58年3月12日 「昭和57年度文化財保存事業完了報告書」の提出

3. 調査団組織

顧問	森嶋 稔	(日本考古学協会々員・千曲川水系古代文化研究所主幹)
団長	福島邦男	(日本考古学協会々員・望月町教育委員会学芸員)
調査員	渡辺重義	(長野県考古学会々員) 佐藤 敏 (長野県考古学会々員)
作業員	大森一尾、桜井卯作、倉見 液、関嘉津武、吉沢浩夫、吉沢弥太郎、福島茂子、大森英七、日暮信生、永井健蔵、今井伊一、土屋重雄、土屋貴高、市川貞雄、武重秀子、岩下江美子、桜井宗次、大谷のり子、割田益男、割田信枝、小林孝一、桜井きぬ子、大塚米子、清水七五三子、大森徳太郎、渡辺 郷、岩間岩一郎、岩下あや子、中山ふみ子、永井徳弥、平林さだ、上野知一、矢島好弥	
協力者	桑沢俊雄、桑沢きさ、三石延雄、近藤尚義、吉田 稔、島田恵子	
調査事務	(社会教育係) 大森睦男(係長)、高橋重雄、上野早苗、小林辰男、福島邦男	

4. 調査日誌

- | | | |
|-----------|--|--|
| 6月7日 | 結団式を行う。すでに抜根や表土剥ぎが終了しているので、グリッドの設定を行い、掘り込みを開始する。土師器甕、須恵器環・甕、縄文時代の土器、石器が出土する。 | なかった。したがって、宮久保A遺跡に現場を移すため器材の運搬と一部のグリッド設定を行う。 |
| 6月8日～9日 | 遺構の検出はなかったが縄文前期の土器や石鏃、スクレイパー、フレイクが出土する。土師器碗形土器も出土する。 | 6月15日 グリッド設定をし、掘り込みを開始する。すでにカマドと思われる焼土がみえ、土師器、須恵器がかなり散乱している。 |
| 6月10日～11日 | 調査地域全体の掘り込みを行った結果、遺構は全く検出することはでき | 6月16日～17日 焼土の散乱物で住居址の落ち込みらしきものが検出され、確認作業を行う。土師器甕、須恵器環、甕が多量に出土する。 |

6月9日～23日 G-2・3、H-2・3グリッド中にカマドを検出し、ようやく第1号住居地の存在を確認した。カマドは石組みで比較的良好である。

6月20日～26日 第2号住居地も検出され、1号住・2号住とも掘り込みを行う。

6月27日 1号住・2号住の写真撮影を実施し、テント等器材を布施山寺A遺跡に移した。さらにグリッドの設定を行い、掘り込みを開始。

6月28日～29日 布施山寺A遺跡は、遺構の検出もなく、遺物も少ない状態である。縄文前期土器と土師器、須恵器が少量のみ。

6月30日 宮久保A遺跡の1号住カマド断面の実測と瓜生坂A遺跡の全体測量を行う。

7月1日 布施山寺A遺跡のグリッド掘りを進めながら、岩井遺跡のグリッド設定を行う。

7月5日 布施山寺A遺跡の掘り込みを終え、岩井遺跡に現場を移した。午後からグリッド掘りを開始する。すでに焼土がみえ、土師器や須恵器の坏、甕が多量に出土した。

7月6日 A-4に焼土、炭が多量に出土し、カマドの存在をうかがわせた。

7月12日 A-4周辺部のプラン確認作業を続けるが、住居地の存在は今明らかにならない。他のグリッド掘りも続ける。

7月13日 A-4以外に4ヶ所の焼土がみつかるが、遺構がはっきりとつかめない。

7月14日 B-6、C-4、D-4に住居地の落ち込みと思われるものがみつかる。この付近から集中して土師器、須恵器の坏や甕が出土する。

7月15日 B-6、C-4、D-4にかけての落ち込みらしきものは、遺構ではないことがわかる。検出された第1号住居地の掘り込み

を行う。

7月16日 1号住と2号住の掘り込みを行う。1号住からは、ヘラ削り痕のある坏が出土しており奈良期の住居地ではないかとの見方ができる。2号住は、プラン検出の際南側が掘り過ぎになっているため、やや掘り込みにとまどう部分がある。

7月20日 2号住から須恵器の大甕が出土する。内側を上に向け、かなり破損してはいるが、器形を判断するには十分な資料である。グリッド掘りも継続して行う。

7月23日 本日まで、2号住からは須恵器の大甕の他に坏、石臼が出土する。またカマドは上部はすでにないが、両袖部が良好で、焼土の保存状態もよい。カマド手前からは、網物のような炭化物が出土し、繊維も良好に残っている。1号住は、掘り込みが終了し、清掃段階に入った。

7月24日 1号住の実測、清掃、写真撮影を行う。2号住も1部の掘り込みを行い清掃と写真撮影を行う。

7月27日 調査員と作業員1名により、2号住のやり方を組む。

7月28日 2号住と1号土壌のやり方実測を行う。又終了後、遺物の取り上げも行う。

7月29日 器材の搬出を行い、バイパス建設工事に伴う全ての現場調査を終了する。

以後12月初旬まで遺物の洗浄を中心に遺物整理を実施。本年度の契約に係る発掘調査は、12月20日で終了した。

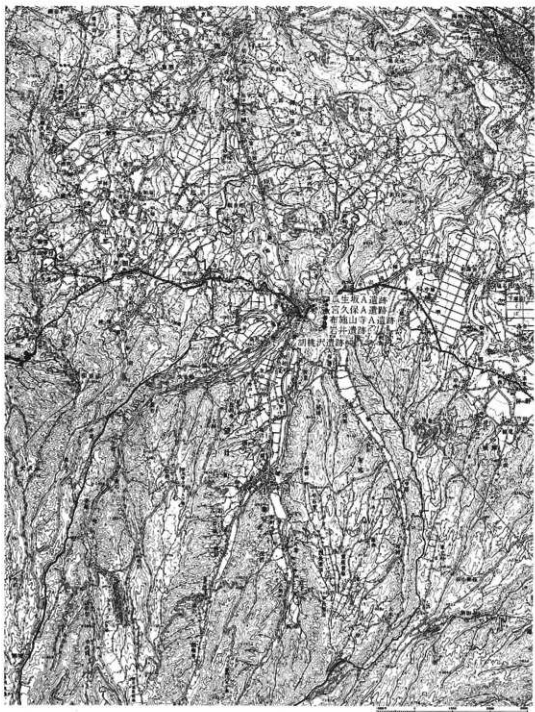
なお、本報告書作成業務は、昭和58年度に締結した委託契約に基づいて実施した。

第II章 遺跡の立地及び歴史的環境

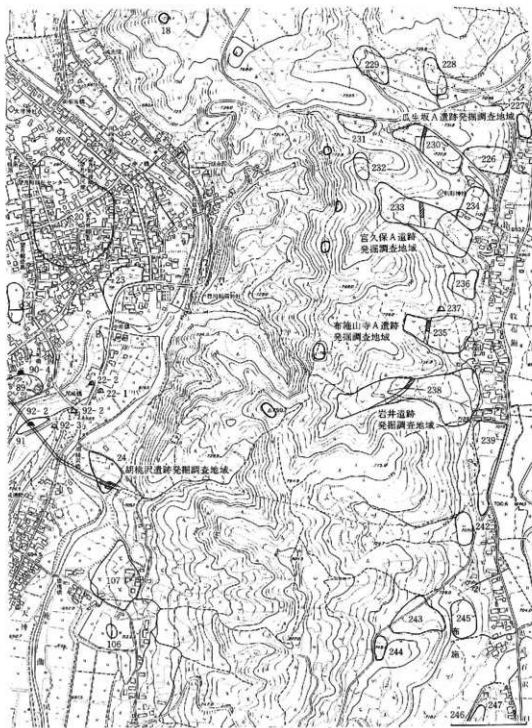
望月町は、北佐久郡の中でも千曲川の西方に位置し、北は北御牧村、西は立科町、東は浅科村、南は一部佐久市と隣接している。西南方向には、山懐深い蓼科山(2530m)を中心とする山系が連なり、北東方向には千曲川を隔てて聳え立つ浅間山(2560m)の連山を臨むことができる。望月町の地質及び地形の形成は、大きく二つの要因に起因しているといえ、その一つは、蓼科山の火山活動により基盤並びに地形の形成が成されていることであり、もう一つは、御牧原台地や八重原台地地域が地殻の断層運動によって形成されていることである。望月町にかかる御牧原台地は、その南端において上部に「相浜層」(模式地：佐久市相浜)と呼ばれる非常にもうい湖沼性堆積層によって形成され、各所に露頭箇所をみることができる。堆積物は、凝灰岩、泥岩、砂岩および礫質砂岩などで、幾層にもくり返し互層しており、ほぼ水平層に近い。これらの地層の中で、泥岩からは、針葉樹や広葉樹などの珪藻類の化石が産出し、比較的容易に採取することができる。また、相浜層の下部は「瓜生坂層」(模式地：望月町望月)と呼ばれる堆積層があり、メタセコイヤなどの植物化石が得られるところから、新生代第三紀鮮新世の後期に属し、今から約200万年前に形成されたことが知られている。なお、相浜層は、新生代第四紀更新世に属し、200万年前の形成層である。一見すればこれらの台地は、蓼科山の裾野が連なっているように見えるが、瓜生坂地籍から御牧原台地にかけては、形成過程にかなりの相違がみられるものである。

一方、蓼科火山によって形成された地域は、立科町芦田付近、望月町の瓜生坂より北方地域の茂田地籍を除く全地域、さらに浅科村の五郎兵衛新田付近にまで達しており、これらの地域をいわゆる蓼科火山地域と呼んでいる。中央に位置する蓼科火山群の南方には、八ヶ岳火山群が連なり、また西方には霧ヶ峰火山群がその雄姿を止めている。蓼科山は、全般に緩傾斜の裾野が北方の望月町方向へ延び、しかも長く雄大である。大河原峠付近にあっては、極めて急傾斜の谷を形成しているが、多くは蓼科山を中心に放射状に延びる緩やかな谷を形成している。これらの地域は、安山岩の分布が広くみられ、中でも両輝石安山岩、しそ輝石安山岩、角閃石安山岩が主体を成している。これらは、望月町の浅田切、八丁地、疊石、菅原、大谷地、吹上など、八丁地川中流域に見ることができ、しかも熱の珪化作用による板状節理がものごとみに発達し、天然記念物のごとき美しい露頭箇所を見ることができる。望月町を流れる主流は、鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川の4河川があり、いずれも蓼科山を源流とし、長い裾野を抜って流下し、千曲川に合流している。

これらの蓼科山と主流4河川は、人間の生活や動植物の生息に対し必須の自然的条件であるとともに、これらの自然環境を中心に過去から現在に至る間、脈々と生活が営まれてきたのであり、当地方においては、まず基本的ともなるべき重要な位置を占めているものである。



第1圖 発源調査地域位置図 (1 : 100,000)



第2図 発掘調査地域概要図及び周辺遺跡分布図 (1 : 10,000)

胡桃沢遺跡は、瓜生坂に近く、また鹿曲川と八丁地川の合流地点に近い、鹿曲川右岸第二河岸段丘上に位置している。背後は、蓼科山の裾野をひかえ、そこからの押し出しが基盤ともなっている。瓜生坂A遺跡他3遺跡は、布施川の西方に続く蓼科山からの裾野の東向き緩斜面に位置しており、胡桃沢遺跡とは、この裾野をはさんで、東と西で相対する位置関係にある。瓜生坂の西側には、極楽寺遺跡、金井原遺跡、上の段遺跡などの縄文時代中期～後期の遺跡が分布しているのに対し、東の布施側にはほとんど無いといってよい。古墳群は、双方に存在し、すでに一部調査を実施した大塚古墳群、尾崎古墳群、柳沢古墳群など、当地域の中でも規模の大きなものが存在している。また興味をひくのは、瓜生坂祭祀遺跡と御牧原古地に位置する望月牧である。古東山道、東山道の経路を考える上では重要な遺跡であり、望月牧、古墳群、窯址との総合的な研究の中で、当地域の古代史が浮き彫りにされるものである。この裾野には、望月城跡も位置しており、古代から中世、そして近世に至っても歴史的最重要地域といえる。

第1表 調査地域周辺の遺跡地名表

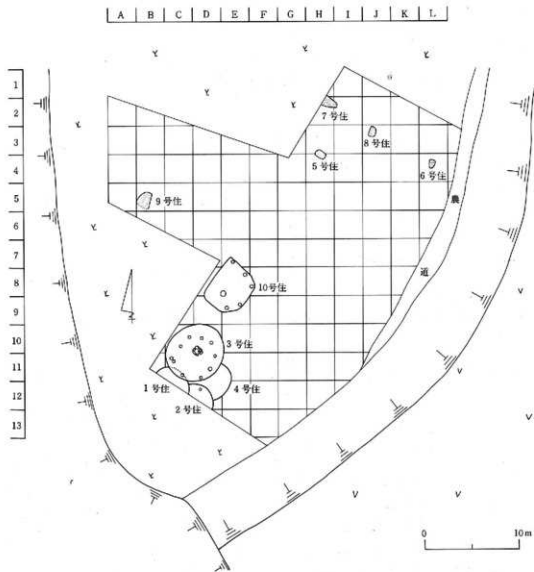
(番号は町道跡番号)

町道跡番号	遺跡名	大字	小字	町道跡番号	遺跡名	大字	小字
18	望月城跡	望月・布施	城・その他	229	布施金山D遺跡	〃	金山
20	上ノ段遺跡	望月	上ノ段	230	瓜生坂A遺跡	〃	瓜生坂
21	金井原遺跡	〃	金井原	231	瓜生坂B遺跡	〃	〃
22-1	尾崎第1号古墳	〃	中原	232	瓜生坂祭祀遺跡	〃	宮久保
22-2	尾崎第2号古墳	〃	中原	233	宮久保A遺跡	〃	〃
23	極楽寺遺跡	〃	極楽寺	234	宮久保B遺跡	〃	〃
24	胡桃沢遺跡	〃	胡桃沢	235	布施山寺A遺跡	〃	山寺
89	大塚遺跡	協和	大塚	236	布施山寺B遺跡	〃	〃
90-4	大塚第4号古墳	〃	大塚	237	布施山寺古墳	〃	〃
91	協和尾崎遺跡	〃	尾崎	238	岩井遺跡	〃	岩井
92-1	尾崎第3号古墳	〃	〃	239	薬師平遺跡	〃	薬師平
92-2	尾崎第4号古墳	〃	〃	242	中大平遺跡	〃	中大平
92-3	尾崎第5号古墳	〃	〃	243	道陸神坂遺跡	〃	道陸神坂
106	沓ワ坂口遺跡	〃	沓ワ坂口	244	池之平遺跡	〃	池之平
107	大柳遺跡	〃	大柳	245	後藤坂遺跡	〃	後藤坂
226	布施金山A遺跡	布施	金山	246	古城遺跡	〃	古城
227	布施金山B遺跡	〃	〃	247	布施城跡	〃	〃
228	布施金山C遺跡	布施	〃				

(1980：望月町道跡詳細分布調査報告書による)

第三章 胡桃沢遺跡

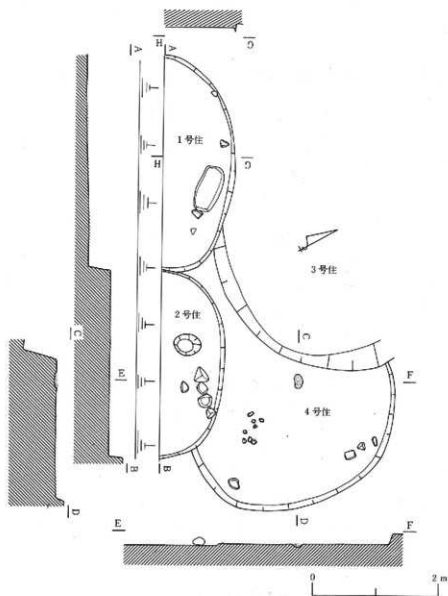
第1節 遺構及び遺物



第3図 胡桃沢遺跡グリッド配置図及び遺構全体図 (1:400)

1 第1号住居址 (第4・20図、図版2)

本址は、調査地域南部のC-11グリッドで検出された縄文時代中期の円形竪穴住居址である。検出地点は、調査地域の境部分であったため遺構の半以上は地区外となり調査することができず検出できた部分は僅かである。規模は、推定の域を出ないが、直径4.5m前後であり、壁高は3～4cmを測る。床面は水平でかなり固く締っており良好である。検出部分では第3号住居址と複合



第4図 胡桃沢遺跡第1・2・4号住居址実測図 (1:60)

する部分に貼り床を行っており、さらに第2号住居址とも複合関係を一部成しながら調査地域外に出てしまっている。柱穴は検出することができなかった。

遺物は、第1層耕作土から住居址床面まで出土しており、しかも住居址の壁が浅いため、伴出遺物をほとんど確認することはできなかったが、プランの北側に、長さ75cm、幅40cmの両面扁平な礫が出土しており、中央部が長軸に沿って凹み、石皿の使用の痕跡をうかがわせるものがある。他に石皿と黒曜石の原石が床面から出土している。土器は全くの混在状態であるため住居址の伴出遺物と判断することは不可能であった。混在状態にある土器の傾向は、唐草文系Ⅱ(曾利Ⅱ式)が中心であるため、その時期の住居址とみてよいのではないと思われる。

2 第2号住居址(第4図、図版2)

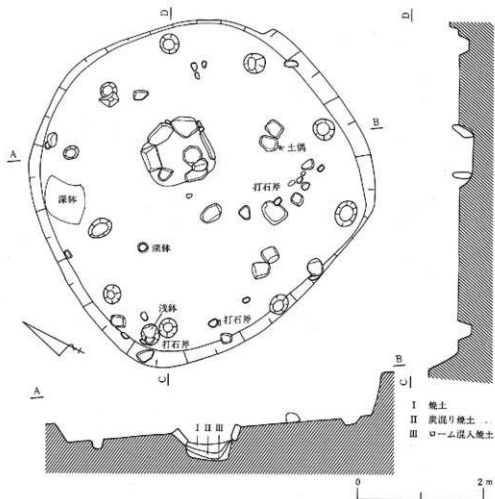
本址は、調査地域南部のD-12グリッドで検出された縄文時代中期の竪穴住居址である。本址も第1号住居址と同様予以上が調査地域外になっているため検出した部分は極く僅かである。規模は、推定で直径4.5m程になると思われ、壁高は3~7cmを測る。床面はほぼ水平で固く締まっている。柱穴は、北側に1個検出している。柱穴付近には、人頭犬の礫が4個並ぶように置かれており、性格を把握することはできないがなんらかの施設のようにも見うけられる。本址は、第1号住居址・第4号住居址と複合関係を成し、第1号住居址との新旧関係は判別できないが、第4号住居址を切って存在しているため、本址の方が新しいことが解かる。

遺物は、床面上より縄文中期の唐草文系Ⅱ(曾利Ⅱ式)を主体とする深鉢形土器片や打製石斧、凹石、磨石などが出土しているが、耕作土から床面まで遺物包含層が続いているため、本址に伴うものが判別がつかない状態である。なお、上層より土偶頭部が1点出土している。

3 第3号住居址(第5・6・9~12・20図、図版3・4)

本址は、調査地域南部のC-10・11、D-10・11、E-10・11で検出された縄文時代中期の竪穴住居址である。縄文時代の住居址の中では最も良好な状態で検出されたものである。規模は、東西5.4m、南北5.2m、壁高は40cmを測る。南側の壁は、第1号住居址と複合関係を成しているために3cmとかなり低い。壁の状態は、軟弱な部分もみられるが全体に固くよく締まっている。プランの中央部よりやや北側には、東西、南北とも105cmを測る方形の大きな石囲炉が位置している。南側の礫は、焼け割れをしていたり、崩れて内側に落ち込んだりしていた。内部には、厚さ23cmもの焼土が堆積し、焼土上面は固く締っていた。炉の掘り方は、105cmと同様であるが、深さは40cmを測る。床面は、タキを成したように極めて固く締っており、直上には、拳大から人頭犬の礫が中央部から東側の壁に向かって集中していた。

遺物は、縄文中期の唐草文系Ⅱ(曾利Ⅱ式)を主体に縄文系土器も含みながら多量に出土している。特に深鉢形土器の復元可能なもの3点、良好な底部からの立ち上りのもの1点が目立つものであり、このうちの1点は、第9図1にみられるもので、住居址西壁際に横倒しとなり押しつぶ



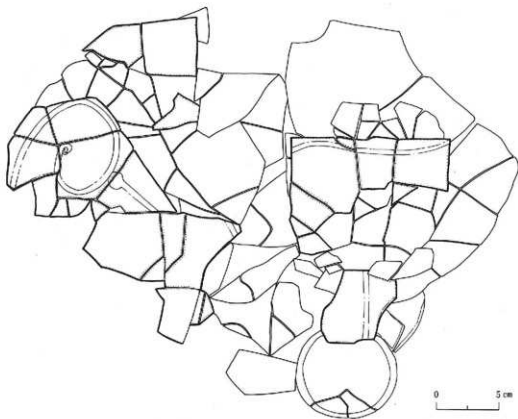
第5図 胡桃沢遺跡第3号住居址実測図(1:60)

されたように展開して出土した。本住居址時期設定の決め手となる資料である。台付深鉢形土器の破片も1点出土している。

石器は、打製石斧10点、横刃型石器1点、スクレイパー1点、凹石2点、磨石1点、石錐1点が出土しており、黒曜石製の石器は、石錐だけで、他に僅かなフレイクが出土しているだけである。打製石斧は、撥型と短冊型であり分銅型はない。

土製品では土偶が1点出土している。出土地点は、プランの中央部よりやや東側壁に近い所であり、床面よりやや浮いていた。肩部から頭部は欠損し、現存部の高さ7.5cm、幅5cmを測り、尻の張り出した写実的な形態を成している。乳房、臍、性器は唐草文を基調とした文様で表現されこの3部位を中心に体部全体に唐草文が描かれている。また肛門と思われる表現もある。下腹部がややふくらんでいるところをみると、妊娠の様子を示しているのではないかと推察される。

蓼科山北麓地域で検出された曾利Ⅱ式期の住居址は、本址が初めてと思われる重要である。



第6図 胡桃沢遺跡第3号住居址深鉢形土器出土状態実測図(1:3)

4 第4号住居址(第4図)

本址は、調査地域南部のD-11・12、E-11・12グリッドで検出された縄文時代中期の竪穴住居址である。第2号住居址・第3号住居址と複合関係をもっており、この2棟にいずれも切られている。また、第1号住居址とも複合関係をもっていたと考えられるが、プランがあまり明確ではない。しかし、第1号住居址のプランに変化がみられないところをみると、これにも切られていたと思われ、従って、第1号~4号住居址一群の中では最も古く位置していたものと思われる。複合関係を成していることから、残存する部分は寸程であり、推定で直径5m前後、壁高は現存部で8cmを測る。床面は、かなり固く締っているが、軟弱な部分も目立つ。プランのほぼ中央部に当たると考えられる所に炉址が位置している。すでに石が抜き取られ、浅い掘り方の中に焼土が検出されただけであった。柱穴は検出できなかった。

遺物は、縄文系土器(曾利Ⅱ式)の深鉢形土器大形破片が出土しているが、復元不可能である。また、上層に混在する土器が出土していたため、住居址の時期設定の資料となりうるが疑問である。石器は、磨石が出土しただけである。

5 第5号住居址 (第7図)

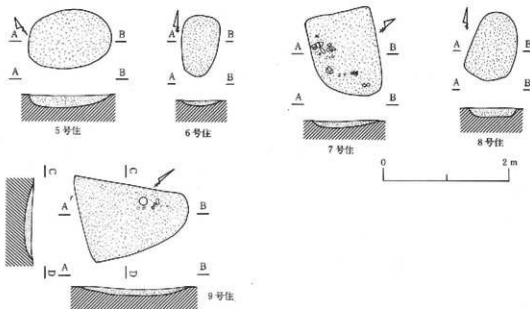
本址は、調査地域北東部のL-5グリッドで検出された平安時代の住居址である。本址は、耕作によりほぼ全体が破壊されており、カマドに伴う焼土だけが検出された。焼土の範囲は、長径80cm、短径50cm、深さ3cmを測る。遺物は、周辺部及び焼土内部から土師器の坏と甕の破片が出土している。

6 第6号住居址 (第7図)

本址は、調査地域北側のJ-3グリッドで検出された平安時代の住居址であり、やはり耕作により全体が破壊され、カマドに伴う焼土だけが検出されただけである。焼土の範囲は、長径80cm、短径110cm、深さ5cmを測る。焼土中より土師器の坏と甕片が出土している。

7 第7号住居址 (第7図)

本址は、調査地域北側のH-2・3、I-2・3グリッドで検出された平安時代の住居址である。本址も同様に耕作によりプラン全体が破壊されており、カマドに伴う焼土だけが検出されたものである。焼土の範囲は、長径100cm、短径105cm、深さ8cmを測る。第5号～9号の破壊された平安時代の住居址の中にあつては、焼土の保存状況が最もよいものである。床面もすでに破壊されているところから、かなり規模の大きなカマドであつたと思われる。焼土中から土師器坏、内黒坏の破片と灰釉陶器片が出土している。



第7図 胡桃沢遺跡第5・6・7・8・9号住居址カマド実測図(1:60)

8 第8号住居址 (第7図)

本址は、調査地域の中央部よりやや北側のH-3・4グリッドで検出された平安時代の住居址である。本址も耕作により全体が破壊されており、カマドに伴う焼土が検出されただけである。焼土の範囲は、長径110cm、短径70cm、深さ5cmを測る。遺物は、土師器杯の破片が僅かに焼土中より出土しただけである。

9 第9号住居址 (第7図)

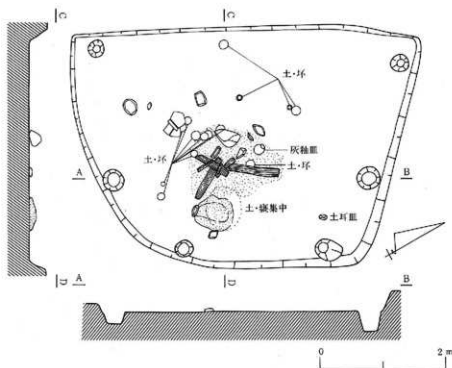
本址は、調査地域西部のB-5グリッドで検出された平安時代の住居址である。本址も耕作によりプラン全体が破壊されており、カマドに伴う焼土が検出されただけである。焼土の範囲は、東西80cm、南北170cm、深さ7cmを測る。遺物は、焼土中及び周辺部から土師器杯、内黒環片が出土している。出土土器は、第7号住居址と同様多い方である。

10 第10号住居址 (第8・24・25図、図版9～12)

本址は、調査地域の中央部よりやや南寄りのE-7・8・9、F-7・8で検出された平安時代の住居址である。規模は、東西5.5m、南北4.8m、壁高は深い所で50cm、浅い所で14cmを測る。壁の状態はやや軟弱な部分があるが全般に非常に良く締っており、また床面は、中央部から南側壁面にかけてやや軟弱な部分があるが、他は極めて固く良好である。平面は、北側と西側の壁が直線的であるのに対し、東側と南側は円形に近い様相で、全体に西側壁を底面とする台形状のプランを成している。精査の結果、本址にはカマドが無いことが確認され、いわゆる住宅とは性格が異なる遺構のように見うけられる。中央部には、太くて長い炭化材が放射状に存在し、カマドに替って火を焚いたものと思われる。この周辺部には焼土が広範囲に散乱し、また、東側壁面に近い所に大きな焼土の固まりがみられた。柱穴は、壁面に沿って6個検出され、いずれも深く良好なものである。壁の中央部とコーナーに位置するのも本住居址の特徴である。

遺物は、土師器杯が25点、土師器の耳皿1点、須恵器鉢形土器1点、灰釉陶器皿3点、灰釉壺形土器1点が出土している。土師器の杯は、高台なし16点でこのうち内黒が7点、高台付の杯は9点でこのうち内黒は6点である。これらの中で、全く同じ土や製法、大きさを示すものが2種類14点があり、同じ窯からの資料として興味をひくところである。耳皿は、内外面とも内面黒色研磨が成され、極めて丁寧な作りである。須恵器の鉢形土器はあまり例のみられない器形であり、大形である。灰釉陶器は、皿形土器3点中1点は完形品である。また壺形土器は小破片であるが良好である。これらの遺物の出土状態は、床面中央部の炭化材をとり囲んで杯と灰釉陶器が出土し、南側に須恵器の鉢、北東部に耳皿が出土している。台付の杯は西側部分に集中する傾向がみられた。

本住居址は、住居址として取り扱ったが、カマドが無く床面中央部で火を焚いていること、そ



第8図 胡桃沢遺跡第10号住居址実測図(1:60)

の周りを取り囲んで灰や灰釉陶器が存在していること、耳皿が出土していることなどを考え合わせれば、特殊な遺構として理解することができるのではないと思われる。

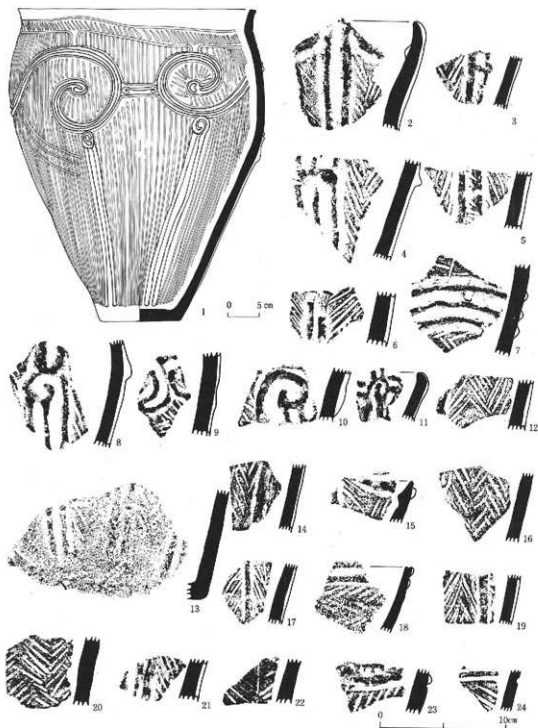
第2節 遺物

1 縄文時代の遺物 (第9図～第23図、図版4・5・8)

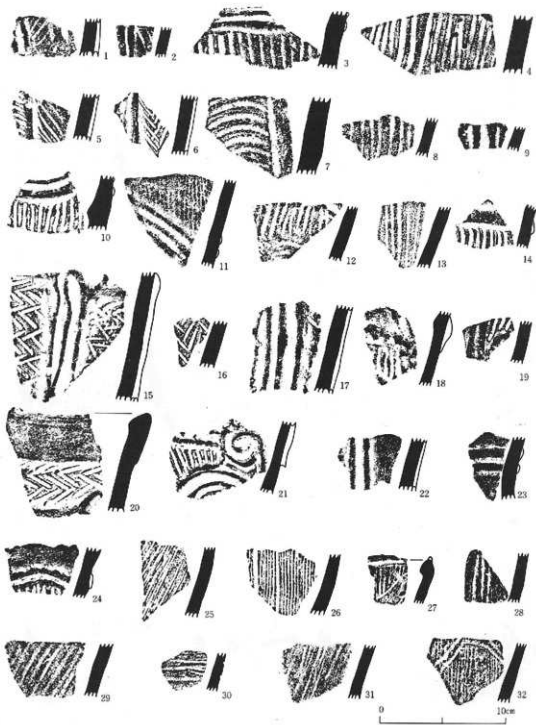
縄文時代の出土土器は、ほとんどが破片であり、器形になるものは第3号住居址の深鉢形土器だけである。しかし破片の数は極めて多い。傾向は、唐草文系の土器が圧倒的に多く80%以上を締め、中でも曾利Ⅱ式に比定されるものが多いが、曾利Ⅲ式と区別つかない資料も多々ある。また縄文系土器は、少量ながら大きな破片がある。土製品は土偶が2点出土し、そのうちの1点は第3号住居址から出土している。グリッドから出土した土偶は扁平で、顔面部はハート形に作られ、裏面は「ハ」字状の細い隆帯が貼付されている。石器は磨製石斧、打製石斧、横刃型石器、スクレイパー、凹石、磨石、敲石などが出土しており、黒曜石の石器が少ないことが特徴である。

2 平安時代の遺物 (第24・25図、図版10・11・12)

平安時代の遺物は、第5号～9号住居址の焼土中から出土した土器と、第10号住居址の一括土器が中心であり、その他は出土していない。遺構ごとに記載したので省略をする。



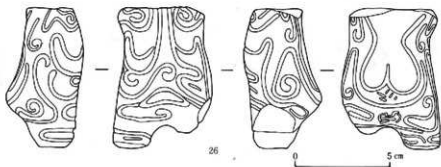
第9图 胡桃沢遺跡第3号住居址出土土器(1·1:6、他1:3)



第10图 胡桃沢遺跡第3号住居址出土土器(1:3)



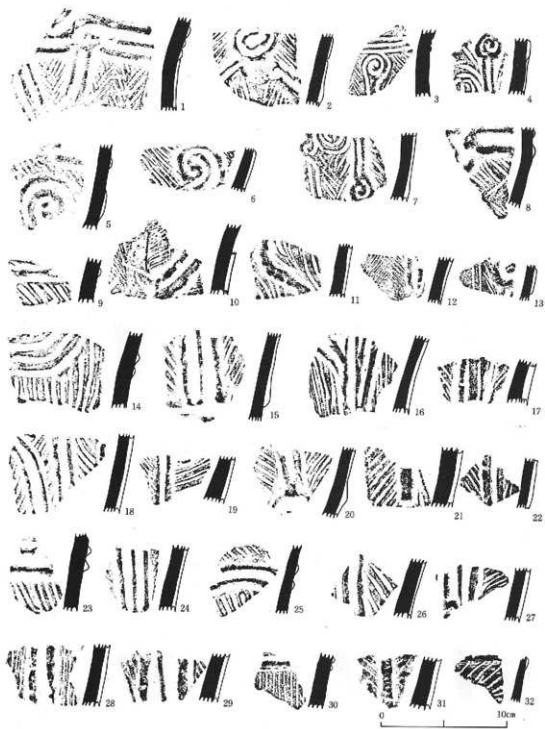
第11图 胡美沢遺跡第3号住居址出土土器(1:3)



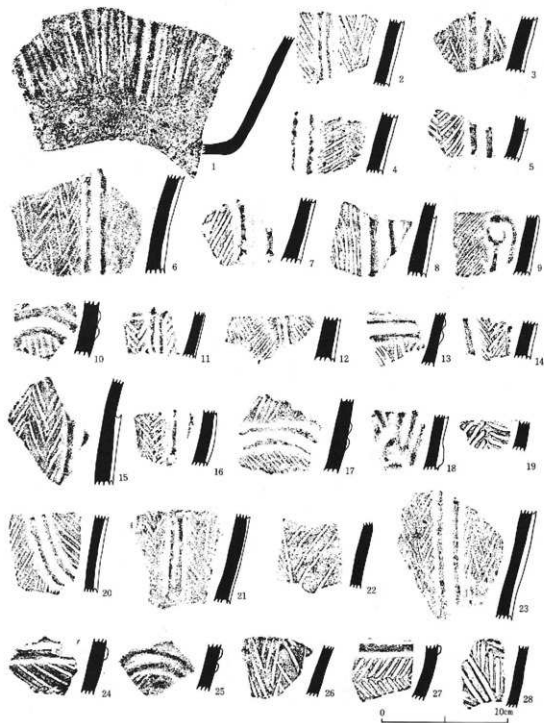
第12图 胡桃沢遺跡第3号住居址出土土器・土偶 (25・26・1:2、他1:3)



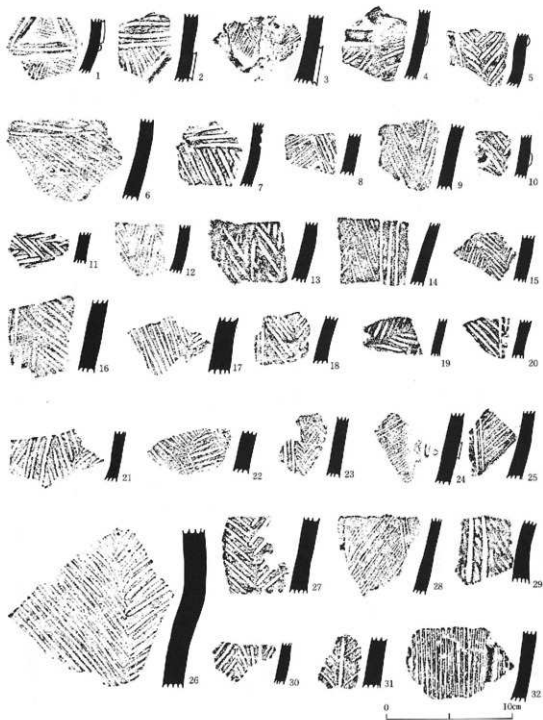
第13图 胡桃沢遺跡出土土器(1:3)



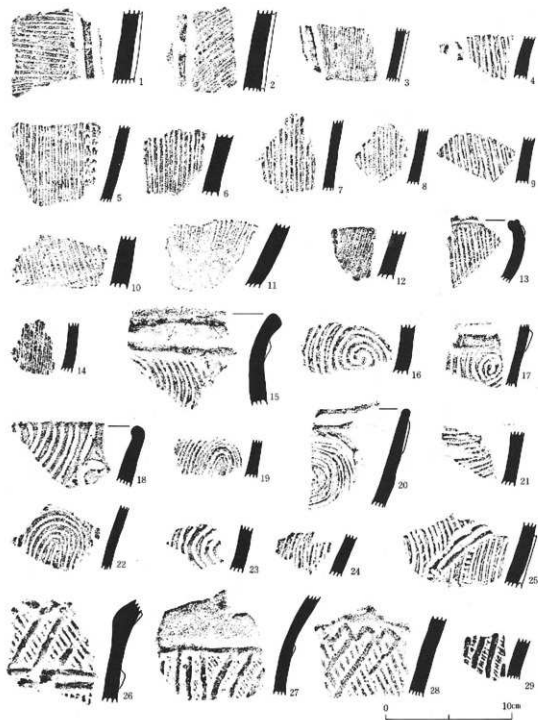
第14图 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)



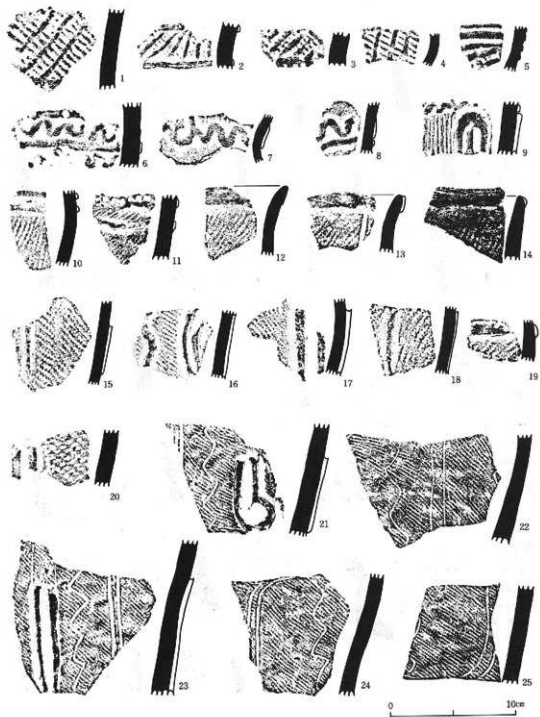
第15圖 胡桃泥遺跡出土土器 (1:3)



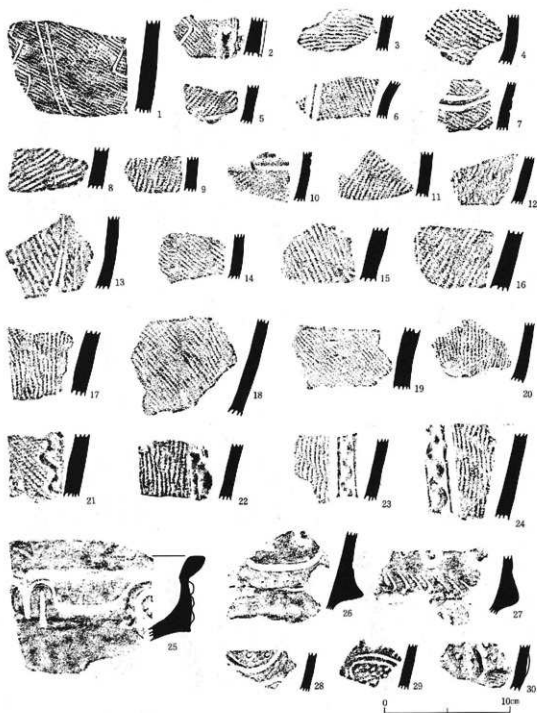
第16图 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)



第17图 胡桃沢遺跡出土土器(1:3)



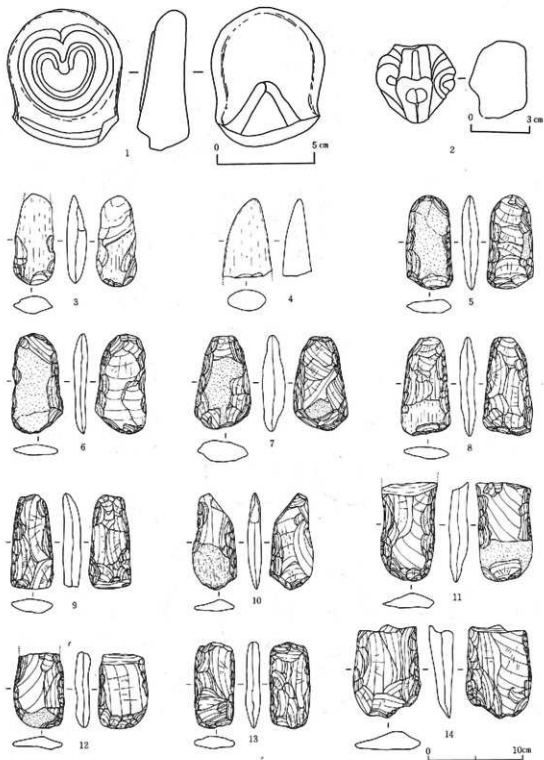
第18图 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)



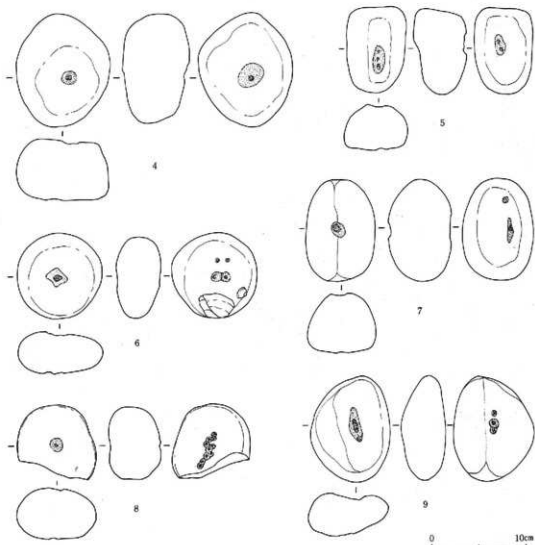
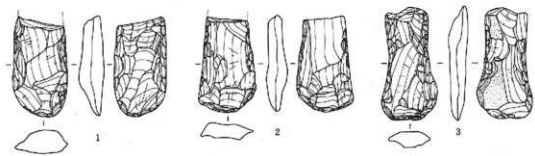
第19图 胡桃沢遺跡出土土器 (1:3)



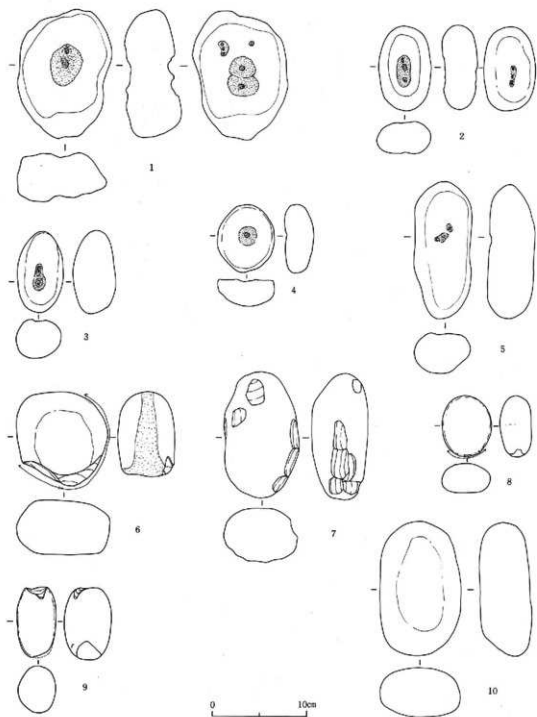
第20圖 胡桃沢遺跡第1号住居址(1)、第3号住居址(2~12)出土土器(1:4)



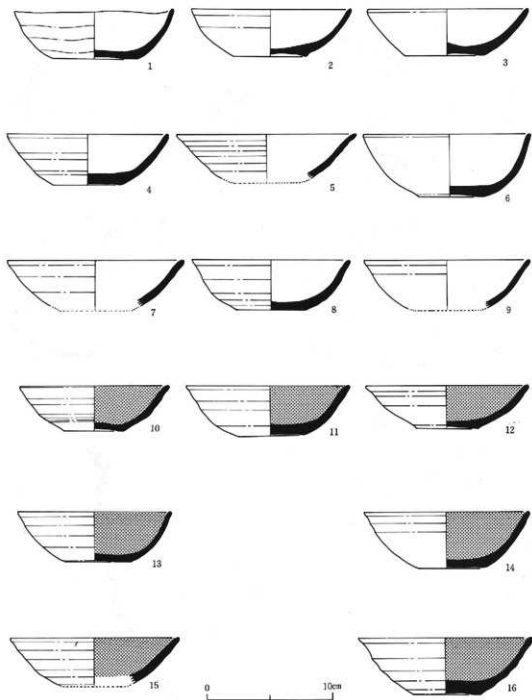
第21圖 胡桃沢遺跡出土土偶・把手・石器（1・2・1：2、他1：4）



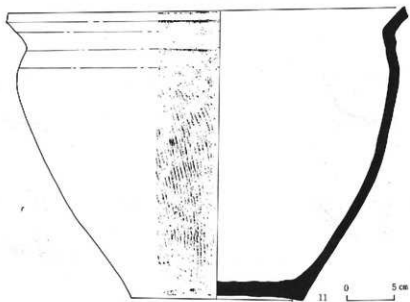
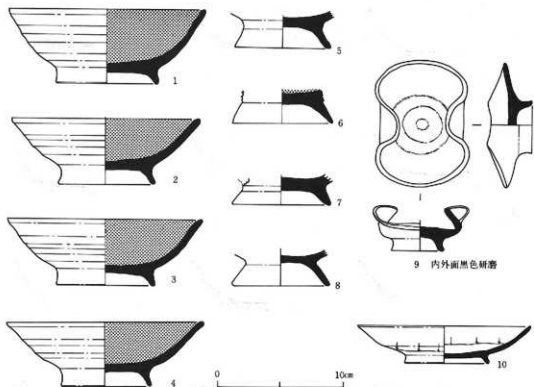
第22图 胡桃沢遺跡出土石器(1:4)



第23图 胡桃沢遺跡出土石器 (1 : 4)



第24图 胡桃沢遺跡第10号住居址出土土器(1:3)



第25图 胡桃沢遺跡第10号住居址出土土器 (11·1 : 4、他1 : 3)

第3節 ま と め

胡桃沢遺跡の調査の内容は、すでに遺構を通して記載してきたので、その要点のみ記述し、まとめとしたい。

本遺跡で検出した遺構は、縄文時代中期の住居址4棟と平安時代の住居址6棟であり、時期的に2つに区分することができる。

縄文時代の住居址で良好に検出できたのは第3号住居址であるが、特別な様相を呈しているものでもなく一般的であるが、蓼科山北麓地域において曾利期の住居址を検出した例は、望月町の下吹上遺跡第1～4号住居址と第1号敷石住居址の他には例がないと思われる。下吹上遺跡は、曾利Ⅳ～Ⅴ式であり、胡桃沢3号住のⅡ式から続くものである。昭和58年度に調査した同町竹之城原遺跡では、第5号土壇から曾利Ⅴ式の両耳鈔付樽形土器が出土しており、これらも含め今後の資料増加に伴って詳細な分析を行いたいところである。

第3号住居址の出土土器は、横倒しになった後に押しつぶされた状態の完形の深鉢形土器と器台付甕形土器の器台部が目目されるものである。石器組成は、打製石斧を主体とする鈍器的な石器が圧倒的に多く、黒曜石製の鋭利なもの、ほとんどないといってよく、農耕的な傾向の強い生活址であるとみられる。また、その他の住居址や遺跡全体の石器の在り方をみても、黒曜石製の鋭利な石器がみあらず、打製石斧を中心とした出土状況である。

第3号住居址から土偶が出土しており興味深い資料である。蓼科山北麓地域において中期後葉期の土偶が住居址から出土したのは初めてのことである。千曲川水系においては、埴科郡坂城町の金井遺跡出土の土偶があり、形態や各部位の文様表現はほとんど同じである。本址の土偶は、床面上に集中する礎とともに出土しており、礎との関連性も注意する必要があるであろう。

胡桃沢遺跡における縄文時代の様相は、第3号住居址に代表されるところであるが、限定された調査範囲をさらに広げ、遺跡全体を精査すればさらに資料の増加と具体的な内容が得られるものと思われる。

平安時代の住居址は、合計6棟を数えるが、このうちの5棟は耕作により破壊され、カマドに伴う焼土だけが検出されており、したがってプランは全く把握することはできなかった。唯一良好であったのは第10号住居址で、内部の様相や出土遺物が興味深い。本址の特徴をまとめてみると、①プランが方形ないし隅丸方形でなく、台形を呈している、②カマドが存在しないこと、③床面の中央部で火を焚いていること、④遺物が焚火の周りをめぐるように出土していること、⑤耳皿が出土していること、⑥沸煮、貯蔵、供献、雑器が整っていることである。

平安時代の住居址形態が不定形な類例はあまり見られないものである。また、カマドが存在しないという住居址も報告例を聞かない。カマドは日常生活におけるいわば中心的な役目を荷うものであり、存在しなければ生活がまずできないといっても過言ではなく、この状況からみれば、

日常生活の営まれた遺構ではないと思われる。床面で火を焚いているのは、単にカマドが無いために行なっていると考えるのはやや単純すぎると思われる。何らかの理由により、カマドは必要がなく、床面の中央部で火を焚く必要があったと考えた方が正当である。しかし、いかなる理由かは、出土遺物等の状況からしか推察はできない。遺物は、土師器の坏、内黒坏、須恵器の鉢、耳皿、灰釉陶器が出土しており、中でも坏類が圧倒的に多い。これらは、中央部の焚火を取り囲むように正位で出土している。この南側には鉢、北側には耳皿といった状況である。この状態を一見すれば、焚火を囲みながら宴を催したようにも推察され、そこには神事的な様相さえ感じられるものがある。焼土や炭、炭化材などの様子から、かなり本址を利用したことがうかがい知れる。以上の点から、日常茶飯事の一般的な住居ではなく、集落内における共同家屋的な性格として本址を位置づけたい。

第10号住居址出土遺物は、他の破壊された住居址から出土したのものも含めて代表されるが、第10号住居址以外の遺物はほとんどが図上復元が不可能なものばかりである。

胡桃沢遺跡緊急発掘調査は、国道142号横バイパス用地分だけに限って実施したこともあり、調査面積はあまり広くない。しかし、限定された地域の中にあっても、縄文時代中期と平安時代の集落の存在が明らかになったこと、さらにその中であって、第3号住居址と第10号住居址の特に興味ある資料が得られたことは大変大きな成果である。この2棟の存在は、今後の研究の中で夢科山北麓地域の標式ともなりうるものであり、重要である。

本地域一帯の発掘調査は、現在のところ望月町に限定されているという状況であり、今後、より広域的に内容が把握されない限り、進展が極めて難しいものとなりそうである。基本的な詳細分布調査から取り組み、現在各地で行なわれている開発行為に早急に対処する必要があり、さらに、地域一帯となって歴史的解明をしていかなければならない。今行なわなければ遺跡は無くなってしまふという非常なる危機的状況下であり、その取り組みを望むところである。このことがいかに有益であるかは、長い年月の中で答えが出ると思われる。

本調査は、以後に記載する布施分のバイパス建設工事に伴うものとは年度も異なり、しかも、委託契約も別であるため、一旦ここで区切りをつけておきたい。

この調査の構成をして下さった関係諸氏、諸団体、並びに寒風の吹きすさぶ中、連日現場調査を支えて下さった調査員、作業員の皆様衷心より感謝の意を表するものである。

第Ⅳ章 瓜生坂A遺跡

第1節 遺 構

本遺跡の調査地域は、望月トンネルの布施側入口の南側であり、布施川に向かって南東方向に緩傾斜する沢状の地形にあたる。調査面積は、513㎡と少なく、バイパス建設用地に沿って設定されたため、遺跡の一部を調査したに過ぎない。

当初、遺跡の表面には縄文前期土器が少量と比較的目立った須恵器の環・甕の破片が散布しており、奈良時代から平安時代にかけての集落址が中心に検出されるべき遺跡として興味のあるものであった。しかし、調査の結果、検出された遺構はなく、遺物の出土のみに止まった。この一帯は、朝鮮人參の耕作で重機による深掘りが行なわれており、その時点で破壊されたものと考えられ、また、遺跡の限定された一部の地域を調査したということで、中心部をはずれていたものと思われる。本遺跡の状況は、遺物の説明のみに止めたい。

第2節 遺 物

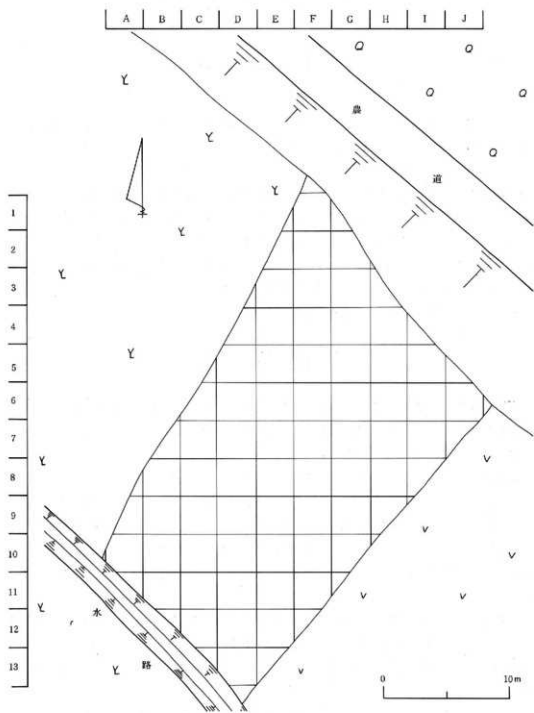
出土した遺物は、縄文時代前期前半から中期にかけての土器と奈良時代から平安時代にかかる土師器環・甕、椀、須恵器環・甕のそれぞれ破片であり、器形に復元できる資料はなかった。また量的にも僅かであり、希薄な状態であった。

第27図1・2・6・7は、押圧縄文が施文されており、胎土に僅かな繊維が混入されている。8～26は、施文技法はそれぞれ異なるが、胎土に多量の繊維が混入している。27・28は、前期後半の諸磯C式に比定されるもの、29～31は、曙ヶ峰式からの系統をもつ中期初頭の資料である。

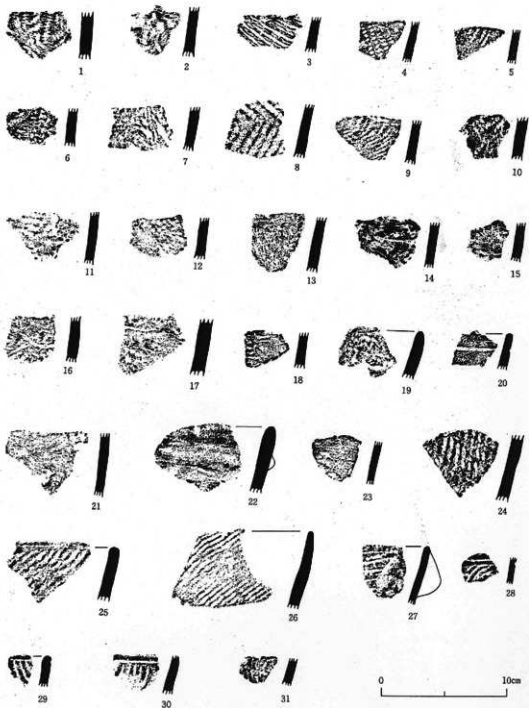
縄文時代の土器は、全体に磨耗しており保存状態があまり良くなく、また量的にも少量である。胎土に繊維を含む前期前半の資料が中心であり、本地域における関連資料の増加をまちたいところである。

第28図1～21は、須恵器甕形土器の破片である。1～12は、表面に青海波文の整形痕が残っているもので、奈良時代の土器とみてよく、21までの土器も同時期ないし平安時代にかかるものと考えられる。望月地域で青海波文が残る資料は限られており、調査によって得られたのは初めてである。

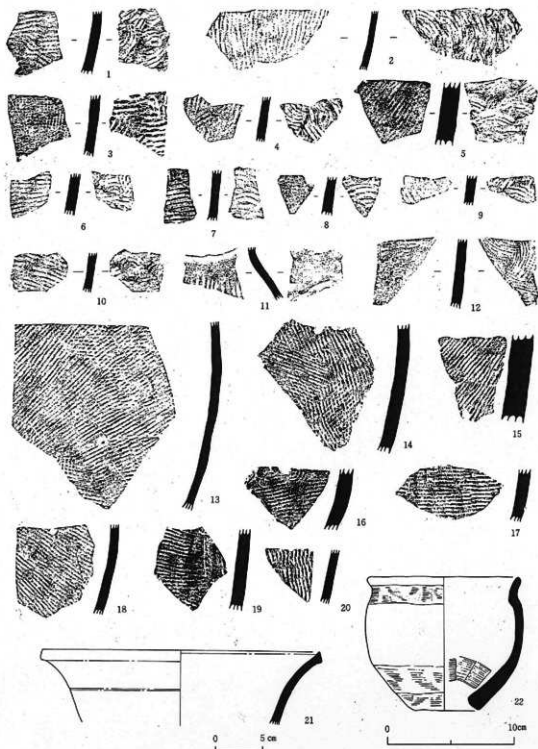
第28図22は、布施金山A遺跡で耕作中に出土した参考資料である。内外面とも赤褐色を示し、ヘラ削りの整形痕が顕著である。底部には、焼成後に穴が開けられ、底部全体が欠損している。こしきとして利用したものと思われる。



第26図 瓜生坂A遺跡グリッド配置図 (1:300)



第27图 瓜生板 A 遺跡出土土器 (1 : 3)



第28圖 瓜生坂A遺跡出土土器(21・1:4、他1:3)〔22は布施金山A遺跡參考資料〕

第V章 宮久保A遺跡

第1節 遺構及び遺物

宮久保A遺跡は、瓜生坂A遺跡が位置する沢と、布施山寺A遺跡が位置する沢の間にあり、同様布施川に向って緩傾斜する東向き斜面にある。調査面積は630㎡と狭く、また遺跡の中心部をはずれていたため、遺跡の性格を把握するには不十分な条件にあった。ただし、本地域は、「古道」を研究する上では学史的存在の地であり、また、「望月牧」との関連上重要な位置にあたり、その意味ではなにかしらきっかけがつかめそうな成果があった。

検出された住居址は2棟であり、興味ある遺物が出土している。

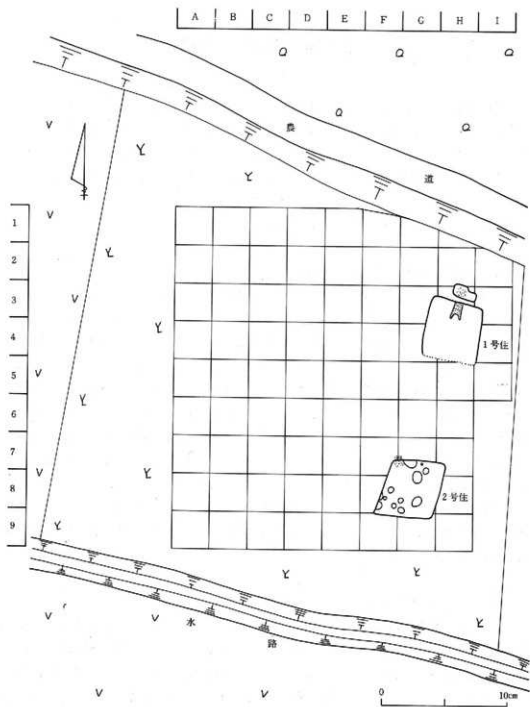
1 第1号住居址 (第30・32図、図版16・18)

本址は、調査地域北東部のG-3・4、H-3・4、I-3・4グリッドで検出した奈良時代の住居址である。規模は、東西4.38m、南北は推定で4.5m、壁高は最も高い部分で30cmを測る。地形が、沢の中央を流れる水路に向って傾斜しているため、斜面下方に当る南側の壁面は、耕作によりすでに破壊されていた。壁は、北側と東側が固くしっかりしたものであるが、西側はやや軟弱であり、床面は固く良好であった。カマドは、北側壁面のほぼ中央に位置し、粘土カマドである。一部、土器を置く所には礎を使用している。長軸が1.45m、最大幅90cmで、住居址の内側に本体がある。カマド内部及び焚口部には、厚く多量の焼土が残り、長期間の使用を思わせるものがある。また、東側壁面下には、袖石らしい礎と、その間に焼土が多量に存在しており、ここでも火を焚いた痕跡がみられるが、当初のカマドである可能性がある。

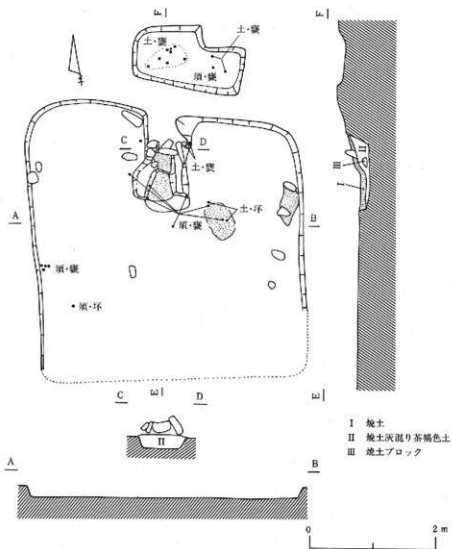
遺物は、須恵器坏(第32図1～3)と須恵器蓋4、甕、土師器坏、甕が出土している。坏及び蓋は、ヘラ削りの整形が成されており、また甕は青海波文の残るものである。全体に出土量は少ないが、時期設定には十分な資料である。

2 第2号住居址 (第31・32図、図版17)

本址は、調査地域南東部のF-7・8、G-7・8・9、H-7・8グリッドで検出された奈良時代の住居址である。規模は、東西4.3m、南北4.55m、壁高は25cmを測る。形態は、南北にやや長い菱形に近いが、方形とみてよいものである。壁や床はかなり軟弱であり、タタキ等の様子はほとんどみられない。本址周辺部は、地下水の湧出がありそのために軟弱さを示しているのかも知れない。カマドは、はっきりした形態をとっておらず非常に不定形な状態であるが、北西部コーナーに位置している。上部構造が確認されなかったので明確ではないが、粘土や石組みの痕



第29図 宮久保A遺跡グリッド配置及び遺構全体図 (1 : 300)

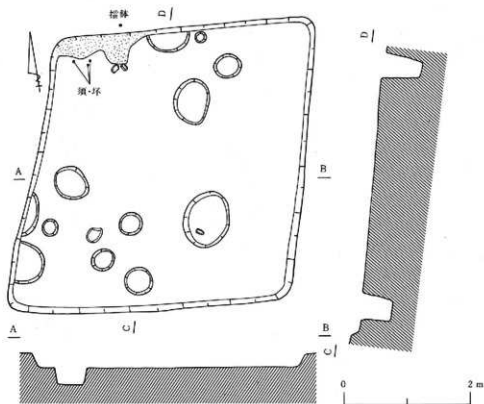


第30図 宮久保A遺跡第1号住居址実測図(1:60)

跡が全くみられずに、床面から壁にかけて傾斜する張り出しがあり、この部分が焼けているだけであった。柱穴は土壌との区別が難しく判断しにくいところであるが、不定形に6個とみてよさそうである。従って土壌が6基である。いずれも深く規模が大きいものである。

本址の構造は、他の住居址とは異なる様相を呈しており、その理解が難しいところであるが、ここでは新しい類型と判断し、他の資料の増加を待ちたいところである。

遺物は、須恵器坏と擋鉢(第32図5)、甕が出土している。坏は図上復元できない小片であるが、へら削りの整形痕を残すものである。擋鉢は、当地域では初めての出土であり、器高10.2cm、最大幅16.8cmを測る。須恵器の生焼けて、茶褐色を呈している。甕形土器は、裏面に青海波文が残



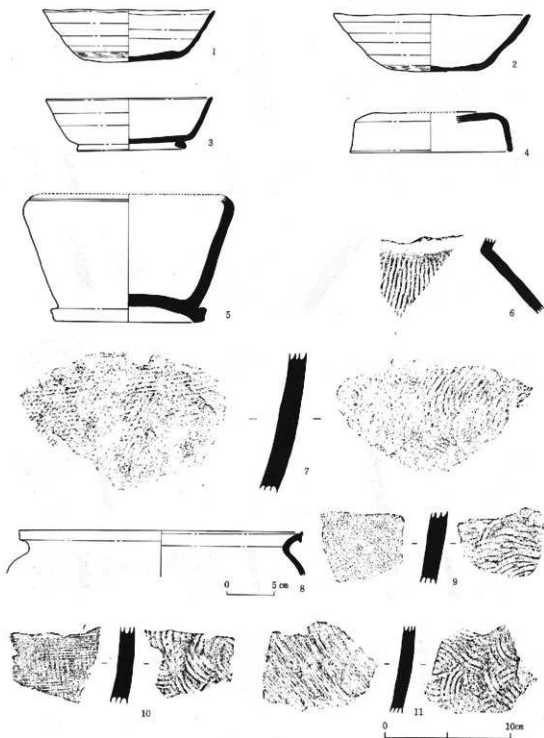
第31図 宮久保A遺跡第2号住居址実測図(1:60)

るもので、全般に厚手で荒い整形のものが多い。これらの遺物からみて、本址は奈良時代に比定されよう。

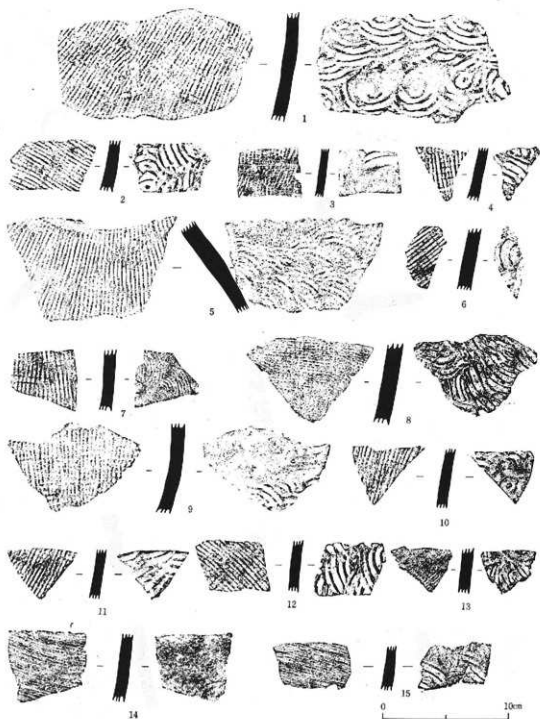
第2節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、土師器の坏と甕、須恵器の坏と甕であり、中でも須恵器の甕が圧倒的に多い、多くは図上復元が不可能なため図示できなかったが、須恵器の甕のみ第33・34図に示した。

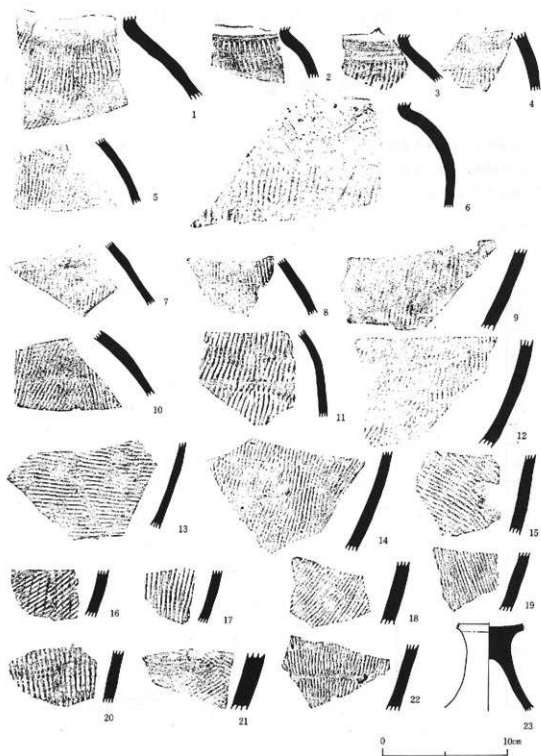
特徴は、住居址から出土したものと同様に、坏底部はヘラ削りにより整形が成され、また甕の内面には青海波文のタタキ目が残るものが多い。望月町周辺には、須釜原窯址群が存在（すでに破壊）し、奈良時代の唯一の窯として把握されており、これらの資料との比較検討が今後における重要な課題になりそうである。



第32圖 宮久保A遺跡出土土器(1~4:1住、5:2住)(8・1:4、他1:3)



第33圖 宮久保A遺跡出土土器（1：3）

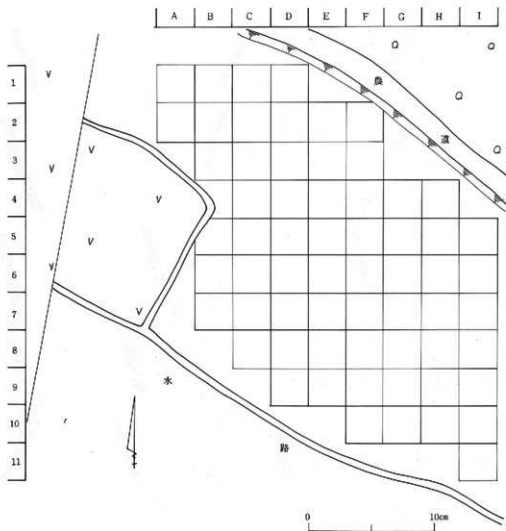


第34图 宫久保A遺跡出土土器(1:3)

第VI章 布施山寺A遺跡

第1節 遺 構

本遺跡は、宮久保A遺跡と岩井遺跡との間にある沢状地形のところに位置している。この沢は他の3遺跡と同様、布施川に向かって緩傾斜する東向き of 立地条件である。調査は、道路建設用地に係る513m²を実施したが、遺跡の中心部は、調査地域よりも斜面下方であり、周辺地域の調査と



第35図 布施山寺遺跡グリッド配置図 (1:300)

いう状況になった。

当初の遺物分布状態では、黒曜石のスクレイパーとフレイク、土師器環、須恵器甕が僅かに散布しており、縄文時代及び奈良もしくは平安時代の遺構検出に期待をかけていた。

調査の結果、遺構は検出されず、遺物だけの出土であった。

第2節 遺物

1 縄文時代の遺物 (第36・37図・図版21)

出土した縄文時代の土器は、全て前期前半である。第36図1～5は、神之木式に比定される土器である。いずれもRとLと思われる結節縄文を施文している。5は、櫛歯状工具ないしは貝殻状工具により、斜位に併行する刺突文が施文されている。原体は、長さ2.8cmで、先端はあまり尖っていない。これらの土器の胎土には、繊維が比較的多く混入している。

その他の土器は、斜縄文、羽状縄文などが施文されたもので、いずれも胎土に繊維が混入している。

石器は、スクレイパー、凹石、磨石が出土しているが、極く僅かな出土量である。

縄文時代の遺物は、かなり磨耗しており、上方から流れて来ているのではないと思われる。

2 奈良時代の遺物 (第38図1～17)

奈良時代の遺物も出土量はそれ程多くなく、また器形になるものもない。

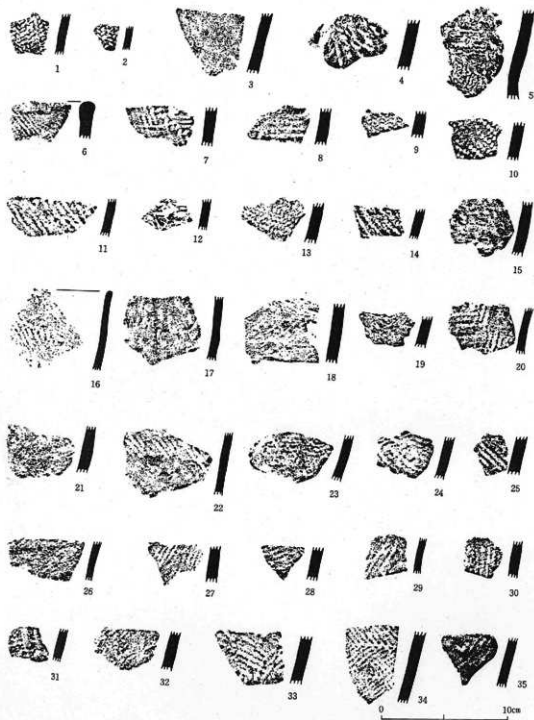
出土したものは、土師器環、甕、須恵器環、甕があり、環は、底部にへら削り整形が行なわれ甕の内面には青海波文のタタキ目が残るものである。

これらの資料は、瓜生坂A遺跡、宮久保A遺跡、次に記載する岩井遺跡と共通性をもつものであり、他の地域にはあまり出土例がみられないところから、この地域が奈良時代の中心的役割りを締めていたかと思える。終末期古墳、8世紀の瓜生坂祭祀遺跡、そして望月牧と同時代性の社会的状況が、この付近に集中しているかのようである。

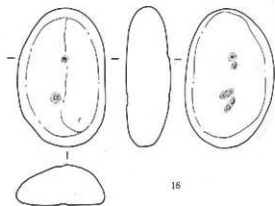
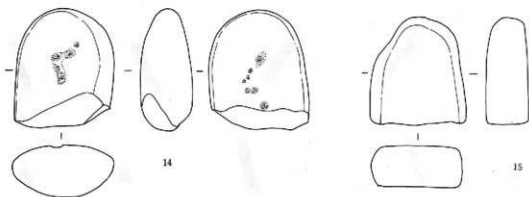
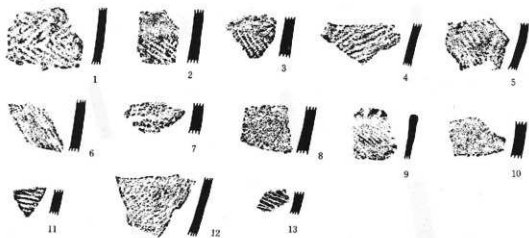
3 その他の遺物 (第38図18)

鉄滓が1点出土している。製鉄址との関連も考えられるが、羽口等それにかかわる資料は出土していない。

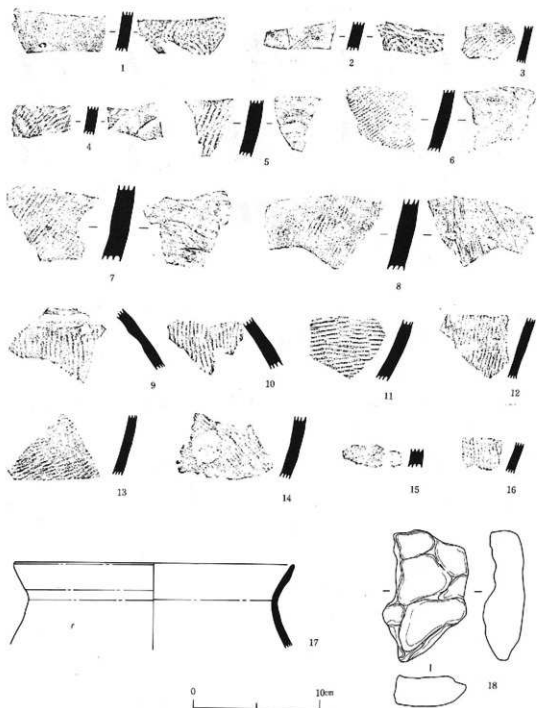
瓜生坂の北側を通る旧中山道沿いに、「金山」という小字が残っており、鉄関係の地名として理解されるが、これらとの関連も興味のあるところである。



第36图 布施山寺A遺跡出土土器 (1:3)



第37图 布施山寺A遺跡出土土器・石器 (1:3)



第38圖 布施山寺A遺跡出土土器・鉄滓（1：3）

第七章 岩井遺跡

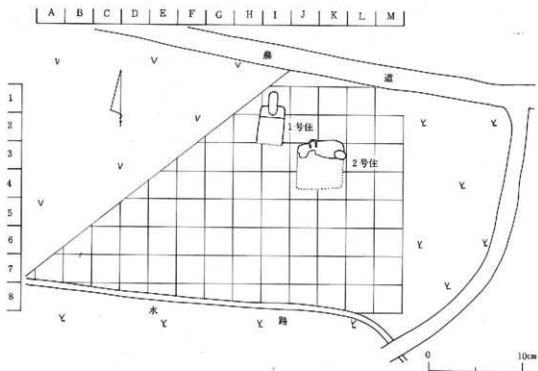
第1節 遺構及び遺物

岩井遺跡は、バイパス建設用地内の遺跡の中では最も南側に位置するものである。他の遺跡と同様に、布施川に向かって緩傾斜する東向きの立地条件にあるが、沢の幅が最も広く、また下方に至ってかなり開けている。遺跡の規模は数倍も大きく、遺物の散布密度も極めて高い。しかし、調査地域は、沢の下方にある中心部からはかなり離れており、上方の末端部を調査したにすぎない。また残念なことに、朝鮮人参の耕作で重機による掘り起しが全体にわたって進み、恐らくは遺構面にまでかなりの地域がかかってしまっていると思われる。

調査面積は、630㎡と限定された地域であり、住居址2棟が検出された。

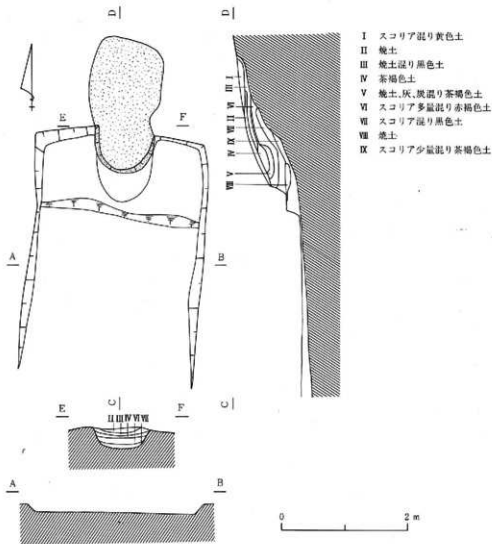
1 第1号住居址 (第40図、第43図1・図版23・25)

本址は、調査地域の北側で検出された奈良時代の住居址で、かかるグリッドは、H-1・2、



第39図 岩井遺跡グリッド配置及び遺構全体図 (1:400)

I-1・2・3である。規模は、東西2.85m、南北はカマド先端部まで含めると、推定で5.5m、カマド先端部を含めずに壁までだと4.2mを測る。極めて南北に長い長方形の形態を成している。斜面下方の南側の壁は耕作によりすでに削り取られてしまっていた。壁高は、30mを平均とするが、各所まちまちである。カマドは、北側壁面の中央部に位置し、東西1.2m、南北2.15mを測る規模の大きなものである。断面の様子からみると、かなりの長期に渡って使用されたことが理解できるが、内部的構造は、土圧によりすでにつぶれていたため把握することはできなかった。内部からは、土師器の坏、甕の破片が多量に出土している。床面は、カマド手前で段状になっており、やや理解に苦しむところである。床面からカマドに続く部分の自然地形は、ここで急傾斜地



第40図 岩井遺跡第1号住居址実測図(1:60)

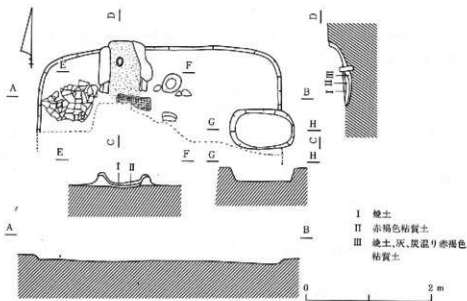
となり、したがってカマドも急傾斜し、焼土や灰が自然に下の方へ落下することが予想される。このため、落下する灰などをここで止めるために二段構造にしたのではないとも想像される。全体に壁、床面ともに固く良好である。

出土した遺物は、土師器環、甕が主体を成し、僅かに須恵器の環片が出土しているだけである。第43図1は、胴部上半の資料であり復元可能なものであった。

2 第2号住居址 (第41・42図、第43図2～4、図版23～25)

本址は、調査地域の中央部よりやや北東寄りで見出された奈良時代の住居址である。かかるグリッドは、J-2・3・4、K-2・3・4である。

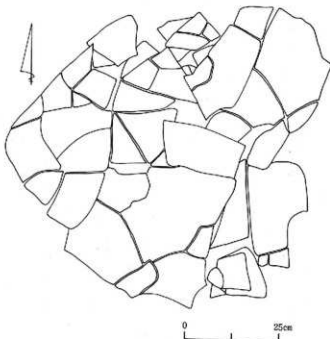
本遺跡は、上方からの土砂の流れ込みが激しい上に、強粘土層を掘り込んで遺構が構築されているため、遺構検出が大変難しく、本住居址もその例外ではない。地形は、沢の中央を流れる水路に向かって傾斜しているため、南側の壁や床はすでに存在せず、さらに検出の難しさから、一部掘り過ぎてしまった部分もある。規模は、東西3.83m、南北は測定不可能である。壁高は、5cm～30cmを測る。壁や床の状態は極めて良好で固く締っている。カマドは、北側壁面の中央部よりやや西寄りに位置し、両袖に直方体の礎を立てて使用しているが、その他は粘土により構築されている。中央部には、土器を支える支石がある。内部は、全体に焼土が堆積し、長期間の使用を伝えるものである。東側の壁を切って土壌が検出されているが、本址よりも新しい時期のものと思われる。



第41図 岩井遺跡第2号住居址実測図 (1:60)

遺物は、須恵器環、甕、石臼、磨石、炭化した敷物が出土しており、住居址の残存部は僅かではあったが、カマドの周辺から良好なセット遺物が出土した。(第42・43図)

カマドの焚口部手前からは、いわゆるムシロ状に織られた敷物が広範囲に出土した。繊維は、稲ワラのような感じを受ける。石臼と磨石は、カマドの東側で出土しており、21cm×18cmのやや楕円形で、内側には12.5cm×11cm、深さ5cmの凹が作られている。石質は安山岩で、全体に凹凸がな



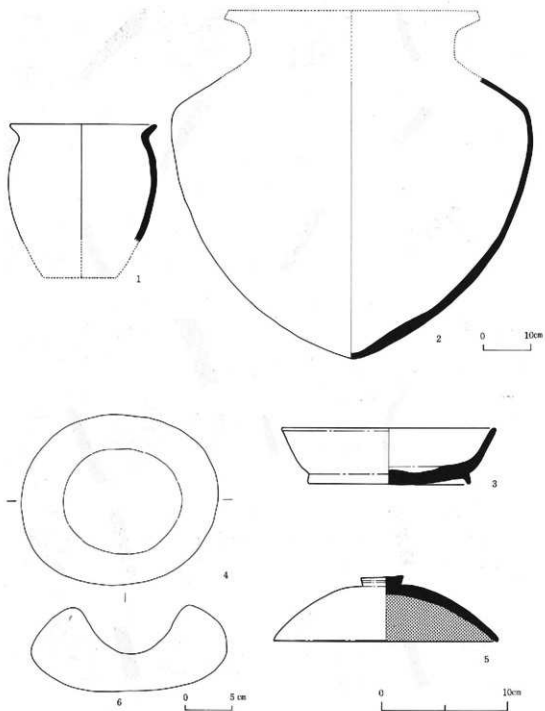
第42図 岩井遺跡第2号住居址須恵器甕出土状態(1:10)

くよく磨かれている。磨石は、石臼と一体をなし、多機能を発揮する石器である。須恵器の環は、石臼の横と敷物の横との破片を接合することにより完形になったものである。環の中では、かなり大きく、直径17cm、高さ4.5cmを測り、胎土もよく精練され、焼成良好な資料である。へら起しの後、削りと磨きを行ない高台をつけたものである。恐らくこの地域の窯で生産したものではないと思われる。甕(第42図・第43図2)は、カマドの西側で出土した。寸个体程しかないが復元をすることができた。本来は水を貯蔵する甕であったと思われるが、出土状況は、他の破片はすでになく、内面を上に向けていたところから、大きな破片の段階で、物を入れるとか水を貯めておくなどの生活に利用していたのではないと思われる。復元完了の計測値は、口縁部52.8cm、最大幅は肩部のところで76.6cm、高さ73.4cmを測る。残念ながら口縁部から頸部にかけての破片がなく、推定の域を出ない。底部は丸底である。器厚は極めて薄く8mm程であるが、胴部下半は、作り継ぎが行なわれやや肥厚している。

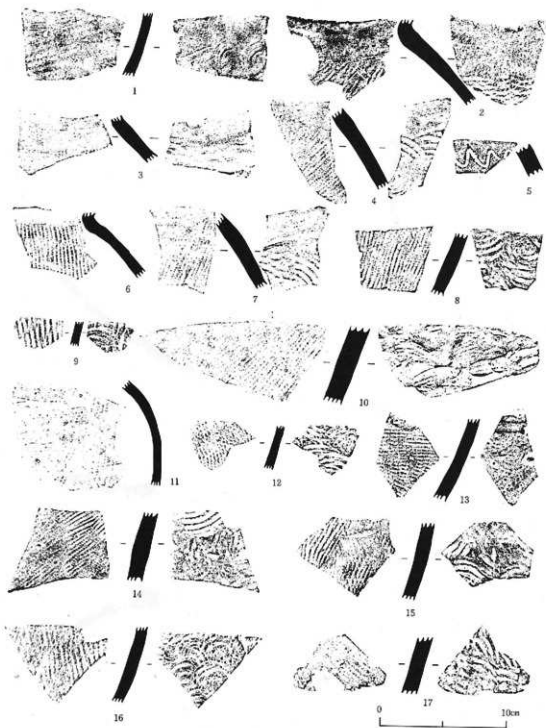
これらの資料は、奈良時代における誠に良好なものであり、重要である。

3 その他の遺物(第43図5、第44・45図、図版26)

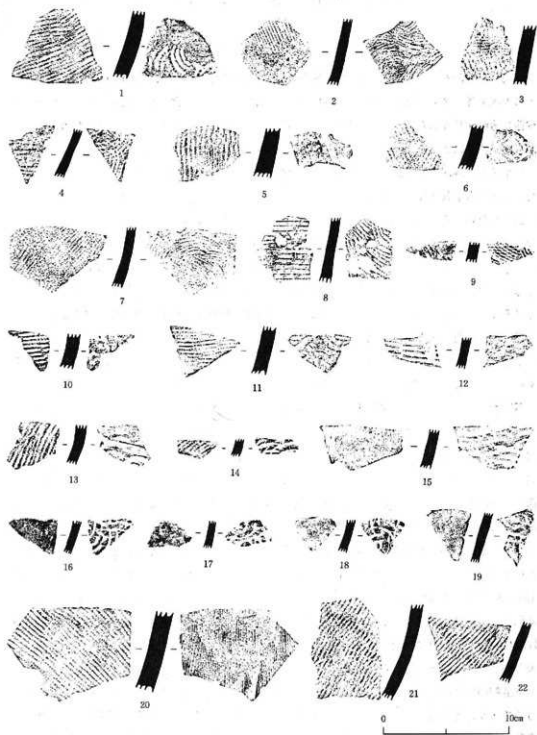
遺構外の遺物は、土師器内黒蓋、環、甕、須恵器環、甕が出土しており、中でも内黒の大形蓋が注目される。直径18cm、つまみまでの高さ5.2cmを測る。



第43図 岩井遺跡出土土器・石器(1:1住、2~4:2住)(2・4・1:4、他1:3)



第44图 岩井遺跡出土土器 (1:3)



第45圖 岩井遺跡出土土器（1：3）

第Ⅷ章 ま と め

国道142号線バイパス建設工事に伴う緊急発掘調査は、昭和53年の大飼遺跡から始まり、昭和55年の大塚1号・2号、尾崎4号の各古墳、そして昭和56年の胡桃沢遺跡、昭和57年の瓜生坂A遺跡他3遺跡が行なわれ、これにより望月地区の調査は全て終了したといえ、それぞれの成果は、発掘調査報告にまとめられている。各期を通し貴重な資料の集積である。

瓜生坂A遺跡から岩井遺跡までの調査は、他の調査では得られなかった重要な所見をもたらした。瓜生坂A遺跡では、縄文前期前半の土器を中心となったが、奈良時代の遺物が出土したことに注目したい。宮久保A遺跡では、当地域では初めての奈良時代の住居跡が2棟検出された。1号住は住居跡の構造が、2号住では播鉢の出土が重要である。布施山寺A遺跡では、瓜生坂A遺跡と性格が同一とみられ、縄文前期前半の資料を中心とし、奈良時代の土器も出土している。岩井遺跡では、奈良時代の住居跡2棟が検出され、特殊な住居跡構造をもつ第1号住居跡と、構造もさることながら、大型の環、石臼、磨石、大型の甕、敷物など今まで得ることができなかった貴重な資料を得ることができた。総じて、縄文時代前期前半の資料が得られたことと、奈良時代の生活址の存在が明らかになったことが重要であり、特に後者は、望月町及び周辺地域の歴史のネックともなるべき時代であるので、極めて貴重な存在である。

本地域における古代史の重要事項は、①望月牧の存在、②須恵器の窯業生産の存在、③終末期古墳群の存在、④古道の通過地点の存在、⑤本調査で確認された生活址の存在であり、いづれも同一の社会的、政治的領域の中で存在し、さらに、御牧原台地及び瓜生坂地帯の一定範囲の中で展開しているという内容である。望月牧は、文献の面から、古窯址群や古墳群は、分布調査や一部の発掘調査から、また古道は出土した遺物からの確認が進み、それに検出された生活址を新たに加えるものである。しかし、9世紀以降は、文献の詳細な記載によりかなりなまでに様子がわかっているにもかかわらず、8世紀以前は、発掘調査などにより把握していかなければならないという難しさがある。その接点は8世紀であり、8世紀代の勅旨牧の有無、窯業生産の始まり、古墳築造の終焉、古道の通過というように、本地域における古代史の社会的展開のほとんどがこの時期に集まっているといえる。その意味でネック的存在であり、解明の最重点対象期である。本地域史の解明は、単に一定地域に限定されるのではなく、政治や文化の動向の中で直接的に中央とかかわりのあった地域だけに、日本史的視野で取り組む必要があると思われる。

本遺跡の発掘調査は、現段階までの研究成果の中に、不明であった生活址の新資料を提供するものであり、各分野がこれで整ったとみることができる。今後は、これらの基礎的資料を基に、資料の追加と、詳細な究明調査が必要となる。「古代史を解明せずして望月町の歴史は語れない」とは誠に利にかなった言葉だと思われる。

図 版

胡桃沢・瓜生坂A・宮久保A・布施山寺A・岩井遺跡

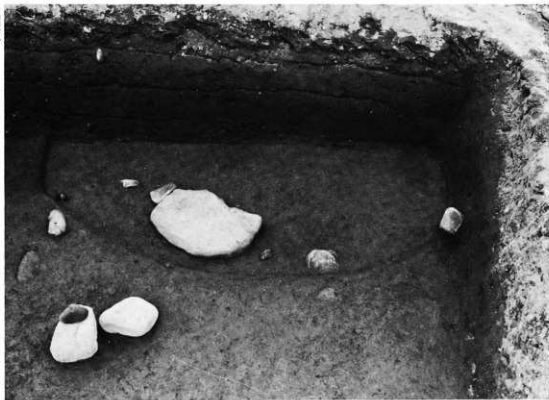
参考資料 (布施金山A遺跡出土遺物)
(瓜生坂祭祀遺跡出土遺物)
(宮久保A遺跡出土遺物)



胡桃沢遺跡全景（北側より）



胡桃沢遺跡調査地域



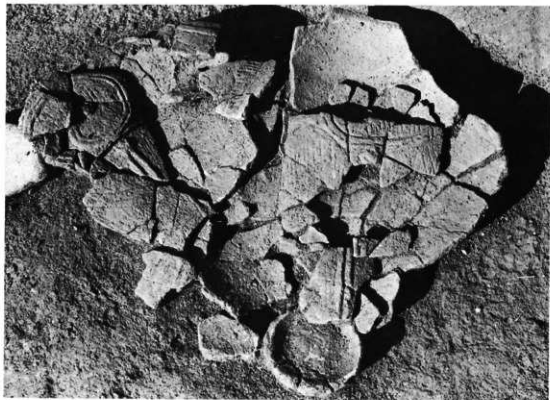
第1号住居址



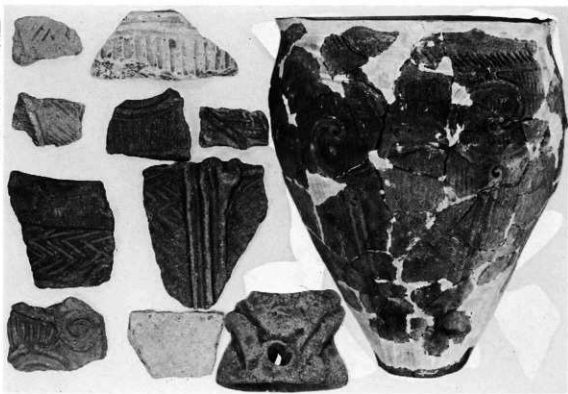
第2号住居址



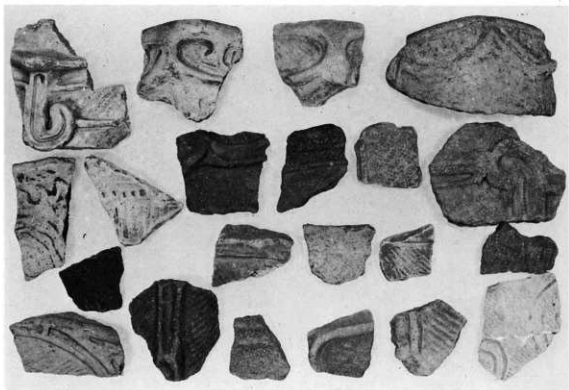
第3号住居址



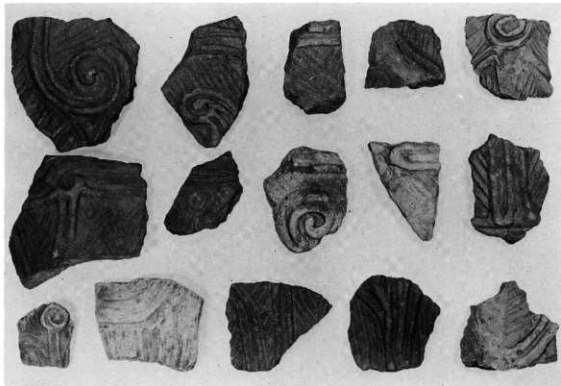
第3号住居址 深鉢形土器出土状態



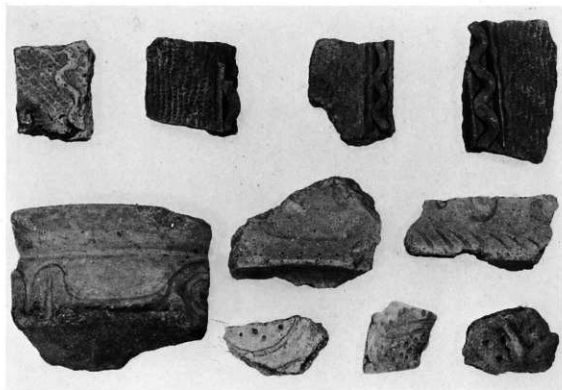
第3号住居址出土土器



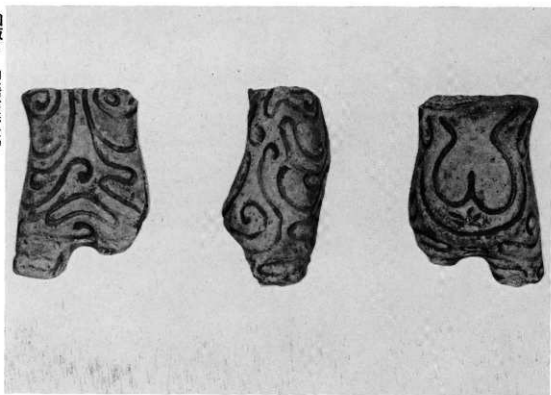
第3号住居址出土土器



遺構外出土土器



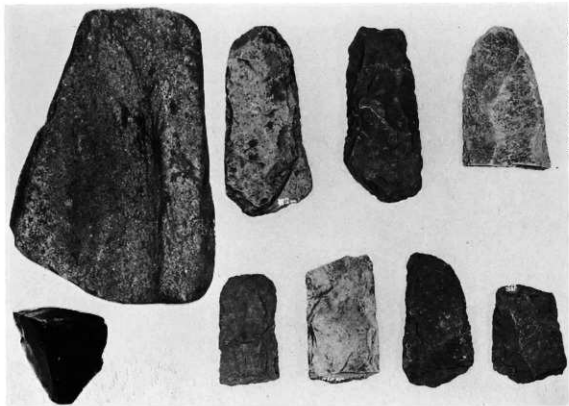
遺構外出土土器



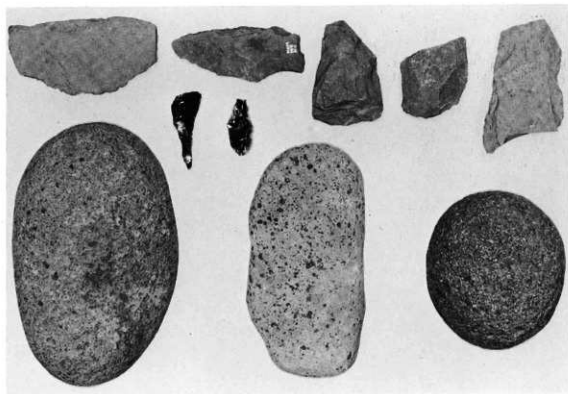
第3号住居址出土土偶



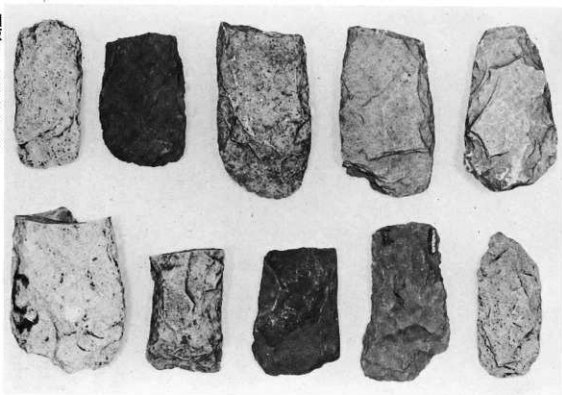
遺構外出土土偶、把手



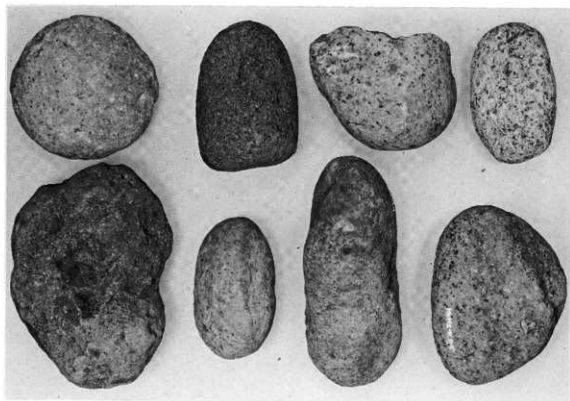
第1号住居址出土石器(石皿・黒曜石)、第3号住居址出土石器



第3号住居址出土石器



遺構外出土石器



遺構外出土石器



第10号住居址



第10号住居址遺物出土状態



第10号住居址环出土状态



第10号住居址环、钵出土状态



第10号住居址耳皿出土状态



第10号住居址灰釉陶器出土状态



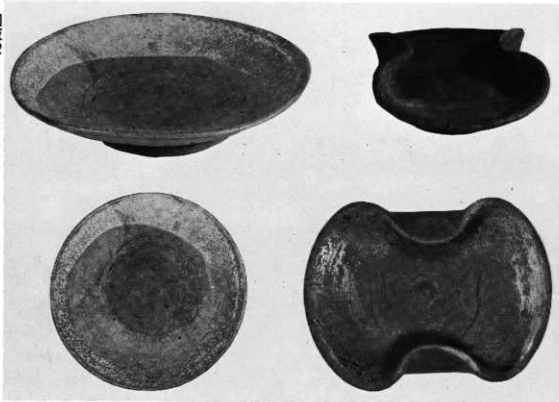
第10号住居址出土坏



第10号住居址出土坏



第10号住居址出土鉢



第10号住居址出土灰釉陶器・耳皿



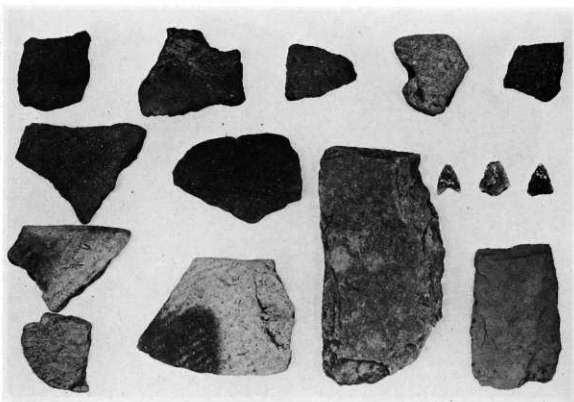
第10号住居址出土土器セット



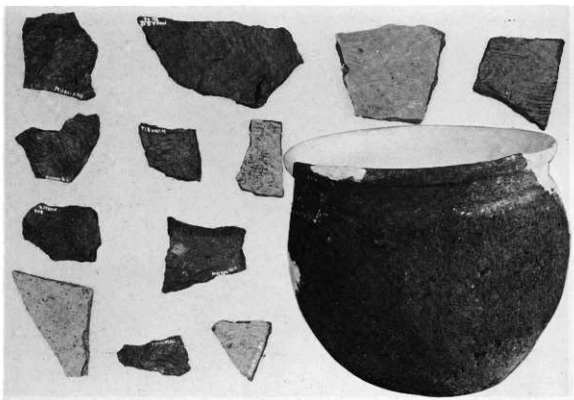
瓜生坂 A 遺跡全景



瓜生坂 A 遺跡調査地域



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物 (こしき：参考資料)



宮久保 A 遺跡全景



宮久保 A 遺跡調査地域



第1号住居址



第1号住居址カマド



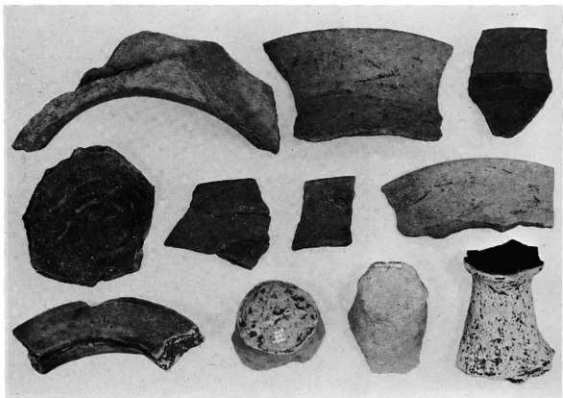
第2号住居址



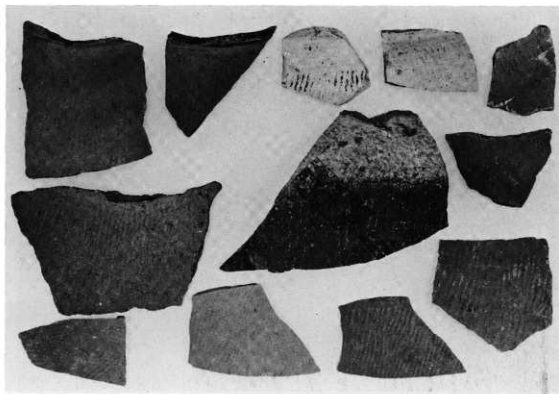
第2号住居址出土擂鉢



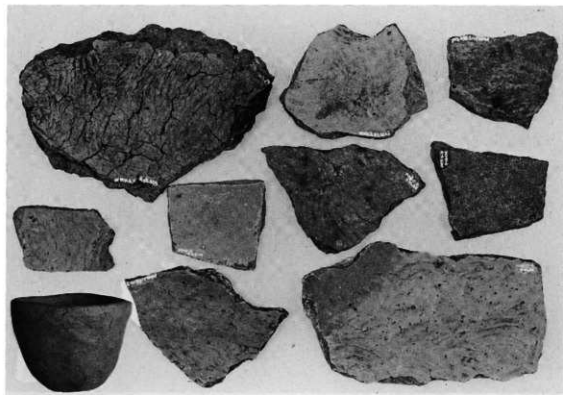
第1号住居址出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



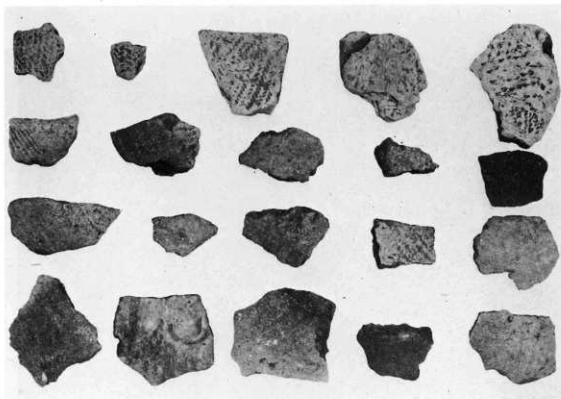
遺構外出土遺物（手捏土器：参考資料）



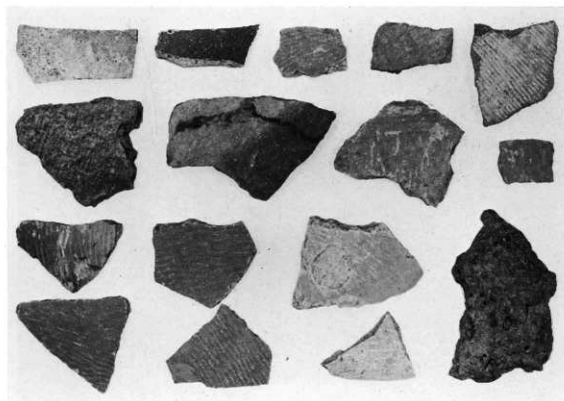
布施山寺A遺跡全景



布施山寺A遺跡調査地域



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



岩井遺跡全景



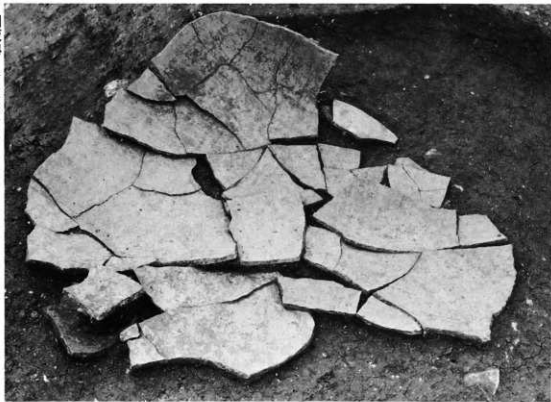
岩井遺跡調査地域



第1号住居址



第2号住居址



第2号住居址出土状态



第2号住居址出土裏



第2号住居址出土炭化物



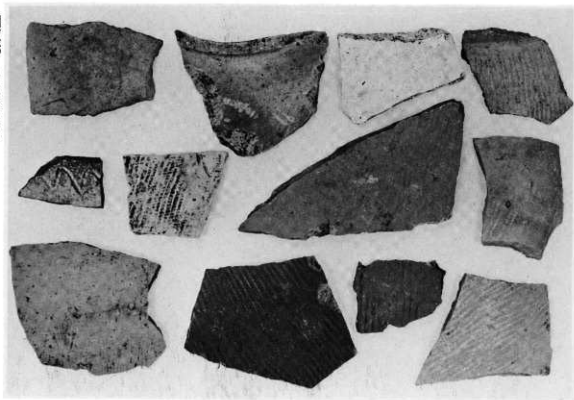
第2号住居址出土石白・环



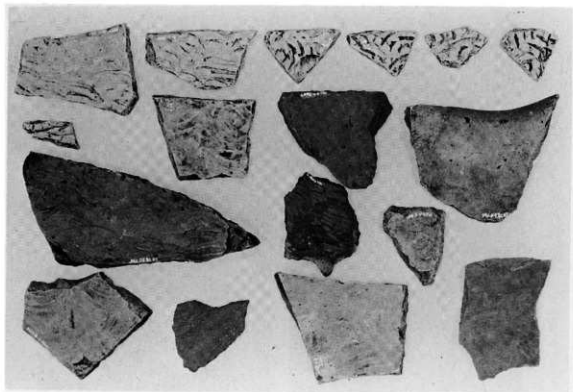
第1号住居址出土甕



遺構外出土蓋



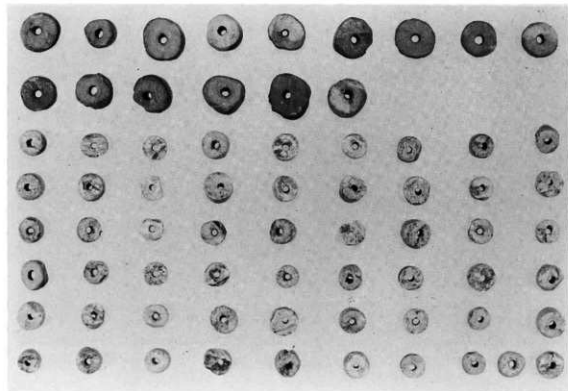
這構外出土土器



這構外出土土器



瓜生坂祭祀遺跡出土手捏土器・白玉



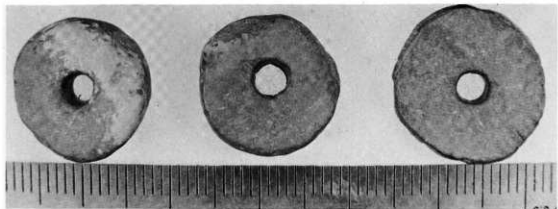
瓜生坂祭祀遺跡出土白玉



瓜生坂祭祀遺跡出土白玉



瓜生坂祭祀遺跡出土白玉 (拡大)



瓜生坂祭祀遺跡出土白玉 (拡大)

望月町文化財調査報告書 第14集

胡桃沢・瓜生坂A・宮久保A
布施山寺A・岩井遺跡

—緊急発掘調査報告書—

発行 1984年3月20日

発行者 望月町教育委員会

佐久建設事務所

印刷 鬼灯書籍株式会社
